
テイルズオブジアビス 【ミュウの異世界冒険記】

にい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブジァビス 【ミュウの異世界冒険記】

【Nコード】

N3028Z

【作者名】

にい

【あらすじ】

エルドラントの最終決戦から幾分か時間が経過したある日。ミュウはチーグルの森にて未だルークの帰りを待ち続けていた。悲しみに耽るミュウ、そんな彼に突然運命の光が瞬く。絶体絶命のピンチにミュウを救った光とは

そんな有りがち設定ではありますが、ミュウの成長物語を最後まで見届けてくれると光栄です。

ちなみにこの小説も以前別のサイトにて投稿していたものです。
完結もしていますし、バックアップもそのまま残っているのです、加
筆修正しながら投稿するだけの簡単な作業です。

第1話 いきなりピンチ!? VS骨(前書き)

初めましての人は初めまして!

TOSからの人はこんにちは!

今回投稿させて頂くのは、今からするとちょっと古い(?) だけど名作中の名作、ジアビスの長編です。

歩いて喋るソーサリーリングことミュウが主役の成長物語、最後まで見届けてもらえると光栄です。

第1話 いきなりピンチ!? VS骨

よしっ！ お前は今日からブタザルだ！

大好きなご主人様が付けてくれた名前。

なんだとっ！ ブタザルのクセに生意気なっ！

尻尾を振りまわしたり、頬を引っ張ったり、時々意地悪だったけど……

俺、変わるよ……変わりたい……

『変わる』と誓ったあの日から、前以上に優しくなったご主人様。

よしっ、ミュウ！ 俺が合図したら火を吹くんだぞ！

一緒に戦った日々、モンスターの威嚇や、障害を駆除するのが自分の役目だった。

そして……

ミュウ、お前は仲間たちの元へ帰れ。

それがエルドラントで訊いた最後の言葉……

それ以来、ご主人様は僕の前から姿を消した。

緑浴に満ちた幻想的な森林。

チーグルの森と呼ばれるその森林は、地名通り聖獣チーグル達が群れを成して暮らしている。

その最深部には堂々と聳え立つ巨木が存在する。

チーグル達はその巨木の中を住処に生活を送っていた。

チーグルは仲間意識の高い種族である。今までも協力し合って生活を送っていた。彼らに抗争と言う言葉は似合わない。

だが、そんな彼らの輪から外れ、ずっと悲壮な表情を浮かべながら黄昏れている一匹のチーグルがいた。

お腹に『ソーサリーリング』という貴重品を身につけ、青い毛をした子供チーグル

「あの子……森へ返ってきてからずっと元気ないわね」

「そうだね。僕達に何か出来ることがあればいいのだけれど……」

仲間のチーグル達が元気がないその子を見て、同情の眼差しを向ける。

「ずっと慕っていた主人が死んじゃったんでしょ？ 今はそっとしてあげておいた方が」

茶色の毛のチーグルがその言葉を発したとき、ずっと仲間の言葉に無反応だった彼の長い耳がピクツと反応を示した。

そして彼 ミュウは威嚇するように毛を逆立てながら言った。

「ご主人様は死んでないですよっ！ 必ず生きて返ってくるって約束……約束を……」

言葉を詰まらせたと思ったら、ミュウは突然大粒の涙を流した。

「（約束……したはずですよ……でも……どうして帰ってこないですの……？）」

ミュウには主人と慕う人間が居た。

主人の名はルーク・フォン・ファブレ。彼はとある技術で人工的

に生み出されたレプリカという存在だった。

オリジナルよりも力も劣る彼は、当時『自分の価値』を見失いがちであった。自分がレプリカだということ卑下し、悲観的になることもしばしばあった。

しかしミュウはそれでもルークを慕っていた。

オリジナルである男よりもレプリカであるルークだけを慕った。

その一途な思いがどれだけルークの救いになったことかミュウは知らないが、それだけルークのこと大好きだった。

そして数年前、ルークは栄光の大地エルドラントにて、ようやく『自分の生まれた意味』を見つけることができた。

しかしそれは自らの命に危険を侵すものでもあった。

ルークは、ミュウに、そして仲間達に必ず帰ってくることを誓い、崩れゆく都市の中で、光に包まれていった。

それ以来、ルークの姿は見えていない……

「……っ！」

ミュウは大粒の涙を浮かべたまま、ダッシュでその場を去って行った。

仲間達が静止するように声を上げていた気もするが、感情的になったミュウの耳には届いていなかった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

涙を風に靡かせ、地を濡らしながら、ミュウはただひたすらに走る。

仲間に涙を見られたくないわけではなかった。でもなぜかあの場には居られなかった。

ミュウはただ無心で走っていた いや、どこでもいいから一人になれる場所を求めてひたすら走っていた。

「はあ…… はあ…… ふう……」

住処とはかなり離れた場所でミュウは一息吐く。走っている内に涙は乾いていた。

しかし、渴いたのは涙だけではない。

「喉が渴いたですの〜」

小さな身体で三十分近くも走った為、ミュウの疲れはピークに達していた。

ミュウは近くの湖に身体を乗り出し、ちゅうちゅと水を飲み始めた。

「……ぷはあ〜っ」

たくさん水を身体に飲み入れたミュウは、そのまま水面に浮かぶ自分の顔をじっと見つめた。

その時に思うことも、たった一人のご主人様のことだけ……

「（ご主人様……今、どこにいるのです？ 会いたいですの……今すぐにでも）」

そんな切なる願いを込めるミュウ。

ぞっ……

その時、背後から足音に似た音が耳に入ってきた。

「（みゅみゅっ！？ この重みのある足音、冷たいようでどこか暖かさを感じるオーラ……ま、まさかっ！？）」

ミュウはこの足音に聞き覚えがある。期待に膨らみを混めてミュウは静かに振り返った。

そこに居たのは

「じゅ、ごじゅごじゅ、ご主人様！ 帰って……帰ってきてくれたですの
~~~~~」

ミュウはたまらず、背後に居た人影に抱き付いた。

「ご主人様、ミュウはこの日をずっと心待ちにしてたですの、またお会いできてうれしいですの、すりすり〜ですの。ああ、このゴツゴツとした感触、たくましい腕、冷たい温もり、間違いなくご主人  
さ」

ぎゅむっ！ びった~~~~んっ！

ミュウが軽く暴走モードに入っていた最中、人影は突然ミュウの

耳を引っつかみ、地面に思いっきり叩き付けた。

「い、痛いのですの。ご主人様何するです……あぁっ!？」

叩きつけられたことで少し平静さを取り戻したミュウは、改めてその人影を見て驚きの表情を表した。

「お、お前は……ご主人様ではないのですのっ!」

ミュウ曰く、ゴツゴツとした感触、たくましい腕、そして冷たい温もりを持った人影は臨戦体制に入っていた。

どうやらミュウがいきなり飛び付いた行為が、この相手は敵意を持っていると勝手に勘違いしてしまったみあいである。

「お、お前は……たしか……死霊スケルトンですの!」

死霊スケルトン、一言で言えば強暴な骸骨。

物理攻撃に耐性があるとは言え、水に弱いわ、風にも弱いわで、弱点の方が多く見積もられているという、言わば雑魚モンスター。

補足しておくが、ルークの容姿はこんな骸骨ではない。

共通点ゼロのスケルトンをどうやったら自分のご主人と間違えられるのか、ミュウに問いたいくらいだ。

しかし、ミュウはそれどころではない危機に面している。

「みゅみゅ〜っ！　ここは逃げるですの〜！」

即座に背を向け、ダッシュで逃走に移るミュウ。

相手が弱点だらけの雑魚とはいえど、子供チーグルに勝てるほど甘い相手ではない。逃走と言う判断は正しい選択だったのかも知れない。

だが、一度敵愾心を見せられたスケルトンもミュウの後を追い掛けてくる。鈍足そうな姿とは異なり、意外に足が早い。

でも、ミュウは足の早さだけは自信があつた。こんな雑魚骸骨などすぐに突き放すことはくらい軽いはずである。

しかし、スケルトンと自分との差はむしろ詰まってきた。

どうやら先ほどの全力疾走の疲れがまだ残っているようであり、足の節々に痛みが生じている。

「みゅみゅ〜っ！　大体なんでスケルトンがチーグルの森にいるのです！？　あいつはアクゼリユス第14坑道にしか出没しないのではなかったのですの〜！？」

ちょっとしたプチトリビアをぼやきながら必死に逃げるミュウ。

一見、余裕があるようにも見えるが、実際はかなり切羽詰っていた。

「（このままでは確実に追い付かれるですの……仕方ないですの……ここは覚悟を決めて、ミュウは戦うですの！）」

決意の炎を胸に抱き、覚悟を決めたミュウはクルリと振り向いてスケルトンの正面に対峙した。

「ふぁいあ〜っ！」

偶然にもミュウの突然の攻撃は不意打ちの効果を放った。

スケルトンは回避する間もなく、腹部にミュウファイアが炸裂する。

「グガウっ！」

スケルトンは奇声を上げるが、ミュウファイアが命中した腹部には特に損傷は見当たらなかった。

ほとんどダメージを受けていない様子である。

スケルトンは右手に構えた棍棒を振りかざし、一気に振り下ろす。ミュウはギリギリの所で攻撃を交わすと、再び背を向け全速力で走り出した。

「や、やっぱりダメですの〜〜〜〜っ！ 勝てっこないですの〜〜〜〜っ！」

半べそを描きながら、走るミュウ。

逃げ切れない、戦えない、怖い、の三拍子が揃った今、ミュウは絶体絶命だった。

そんな絶体絶命のミュウの脳裏に浮かんだのは、かつての仲間達の姿だった。

「（ティアさん、ガイさん、ジェイドさん、アニスさん、ナタリアさん！ 助けてですの……っ）」

ミュウは必死に心中で助けを乞う。何も出来ない自分の無力さを

悔やみながら……

そして、ミュウの脳裏に自分にとって一番大きな存在が浮かび上がる。

「（ご主人様……っ！ 助けて……ですのっ！）」

スケルトンはついに自分の間合いの中にミュウを捕えた。

今度こそ攻撃が当たると核心したスケルトンは棍を大きく振り翳す。

だがその時、ミュウの身体に異変が発せられていることに気付いた。

ミュウのお腹に眩い光が発せられていた。

いや、正確に言うと、ミュウのお腹に着けている装飾品が光りを放っている。

「（こ、これはどういふことですかっ!? ソーサリーリングが光っているのですのっ！）」

光は更に眩しく、そして強く、光を放ち続けている。

目を開けられないほどの光が辺りを包む。

その中心に居たミュウはどうすればいいのかわからずオロオロするばかりであった。

そして爆発的な光がソーサリーリングを中心に放たれた。

「みゅっ!? みゅみゅみゅ~~~~っ!」

ミュウの叫び声だけが、辺りに轟く。その叫び声は徐々に遠ざか

って行くように聞こえた。  
そして、瞬時に光は収まった。

そこにはミュウの姿が完全に消え失せていた。

ちい、座標がずれたか……

声がする。どこからするのかは分からない。

まあいい、この世界に転送は完了した。

だけど、その声は異様な威圧感を放っている。絶対的な力を持つ者が放つ恐ろしいオーラ。

後は部下に回収を急がせるとするか……

それっきり声は聞こえなくなる。ほっと胸を撫で下ろし、安堵する。

そしてミュウの意識はゆっくりと回復していくのであった。

## 第1話 いきなりピンチ！？ VS 骨（後書き）

見てくれてありがとうございます！

それにしても40000文字制限はすごい！

これなら思ったよりも早く完結できるかもです。

第2話は明日投稿予定。1日1本上げることが目標に頑張っています。

第2話 またもやピンチ!? 異世界は敵だらけ(前書き)

ソーサリーリングアクションはアビスが一番好きでした。

最近のテイルズはソーサリーリングすら無くなっちゃって少し寂しいです。

## 第2話 またもやピンチ!? 異世界は敵だらけ

「……みゆ?」

目を覚ました時、まず眼前に広がっていたのは雲で覆われた真っ白な空だった。

ゆっくりと上体を起こし、辺りを見渡す。

「みゆっ!? こ、ここはどこですの〜!?」

周りに見えるのはゴツゴツとした岩石のみ、緑も水もないただ岩だけが存在する山脈だった。

デオ峠と似ているが地形が全く違う。少なくともさっきまで自分の居たチーグルの森ではないことだけは確かだった。

「ミュウはなぜこんな場所に居るのです? たしかスケルトンに襲われて、必死に逃げて、それからソーサリーリングが光って……って、そうだ! ソーサリーリングですの!」

たぶん、事の発端は突然光ったソーサリーリング。

ミュウはソーサリーリングに異常が発生したと考え、リングをまじまじと見つめる。

リングの異常はすぐに発見することができた。

「みゆっ!? な、なんですのこれはっ!? リングに付いている穴が増えているのですのっ!」

ソーサリーリング 元々は三つの穴にそれぞれ音素の譜を刻むことにより、様々な能力を発する便利アイテム。

今までもその力で難解なダンジョンを攻略してきた。

ミュウファイアを出すことができる 第5音素の譜。

ミュウアタックを使うことができる 第2音素の譜。

ミュウウイングを広げることができる 第3音素の譜。

そして、更に空洞の三つの穴が追加されていた。装備者のミュウ自身も見覚えがない穴。

よく見ると、リングの形自体も大きく変わっていた。

「まあ、それはそれとして……」

何の問題解決も至ってないが、ミュウは『それはそれ』の一言で片付けた。

ぐう〜

「お腹が空いたですの〜……」

全力疾走二回の後に充分なお昼寝（気絶とも言つ）、ここまで事件が揃ったら当然次に来るのは空腹である。

だが、周りに人も居なければ、食料になりそうなものも見当たらない。あるのは岩石の山のみ……

なんて思っていると、後方から誰かが近づいてくる足音が聞こえてきた。

「みゆうううっ！ 人ですの！ 人がいるですの〜〜！」

足音の正体を人影だと察したミュウは、大喜びで人影の元へと駆

け寄った。

「す〜み〜ま〜せ」

その人影の姿を見て、ミュウは思わず凍り付いた。

先ほどのチーグルの森でもそうだが、ミュウは考え無しに行動を起こす悪い癖がある。

ミュウは声を掛けたことをすぐに後悔した。

「みゅみゅみゅ〜っ！　なんでレプリカナイトがこんな所にいるですの〜！？」

近づいてきた人影の正体は、かつてルーク達を大いに苦しめたレプリカナイトの大群であった。

レプリカナイト　HPが高い上、攻撃力、防御力も共にバカにならない強さを誇り、弱点も特にない上級部類の魔物。

ルーク達もかつてエルドラントやフェレス島廃墟群にて、こいつにはかなり苦しめられていた。

例え、先ほどミュウが苦しめられたスケルトンが10匹居たとしても、このレプリカナイト一匹にすら遠く及ばないだろう。

そのレプリカナイトが大群にいるのだ。絶体絶命とはこの状況にこそ相応しい言葉である。

「え……えっと……ですの」

見ている。大勢のレプリカナイト達はミュウの顔をじっと見ている。

背中に冷や汗がダラダラと流れる。その勢いは徐々に増してゆく。

「……りんぐ……はっけん……ほそく……する……」

レプリカナイト達のリーダー(?)らしき者が不意に口を開く。単純な単語の羅列だが、さすがのミュウにもその言葉の意味していることは分かった。

レプリカナイト達は一斉に剣を構え、剣先をミュウの方へ向ける。

「みゅっ!? みゅみゅみゅっ!?」

明らかに相手は敵意を示している。敵意を持っていなければ剣を向けるはずがない。

「と、とりあえず……逃げるですの〜っ!」

本日3回目の全力疾走。

だが、当然レプリカナイト達も追ってくる。

ナイト達はスケルトンよりも、そしてミュウよりも速かった。

「なんで最近の魔物達はこんなに足が速いのですの〜!」

今度は大ベそを描きながら一生懸命に逃げるミュウ。  
チーグルは魔物ではないのか？ という素朴な疑問も浮かぶが、  
あえて今はそこに触れないことにしよう。

逃げる最中、ふと前方に今にも崩れそうな大きな岩脈が目映つた。

ミュウはそれを見てある打開策を閃いた。

「（そ、そうですのっ！ あの岩脈の根元をミュウアタックで崩す  
ですの。そうしたら崩れた岩石で追跡の足を止められるかもしれない  
いですのっ！）」

ミュウの見解は正しかった。

岩脈は根元を崩すと、いとも簡単に崖崩れが起こる。  
そうすれば確実にナイト達の足を止めることはできるだろう。  
しかしそれはミュウ自身にも危険が及ぶことでもあった。

「（危険かもしれないけど、今はそんなこと言っていられないです  
の！ 覚悟を決めて……せゝのっ！）」

ソーサラーリングの第二音素の譜が光る。  
するとリング全体が土色に変色した。

「あた~~~~~くっ!!」

ミュウアタックを岩脈の根元に向けて放とうとした瞬間、今度は  
リングに連動してミュウ自身の身体も土色に変色する。

こんな初めてなことであるが、ミュウはそれ以外の所で驚愕することになる。

ドガツシヤアアアアアア~~~~~  
ンッー！

「「「……っ!?」「」」

異常な炸裂音が辺りに木霊する。その音に驚き、レプリカナイト達は思わず足を止めた。

ミュウアタックが炸裂した岩脈には、洞穴並の大きな空洞が出来ていた。

今のアタックの威力は明らかに異常だった。いつもなら小さな岩を砕くことくらいしか出来ないくらいの威力しかないはずなのに……

みし……みしみし……ピキキ……

ミュウが衝撃を与えた箇所を基点に、岩脈は少しずつヒビ割れが発生している。

そして

ガラガラガラガラガラガラガラガラッ！！

大きくヒビ割れた岩脈は一気に崩れ始めた。

「みゅっ!? みゅううううっ!」

ミュウの断末魔が響く中、レプリカナイト達は雪崩のように崩れてきた岩石の下敷きとなっていたのだった。

「あ、危なかったですの……」

レプリカナイト達が生き埋めになった現場より遙か上空。

いち早く危険を察したミュウは、咄嗟の判断でミュウウイングを広げ、上空へと避難していた。

「（それにしても、今のアタックの威力は何事ですか？ あんな凄まじい威力、今まで見たことがないですの……）」

ミュウはそんな考え事をしながら、羽（耳？）を羽ばたかせ、適当に思うが俣の方向へ進んだ。

「（やっぱり、ソーサラーリングに何か異変が起きているのですの……  
…そうとしか考えられな）」

考え事の途中で、ふとミュウはある事実気付いた。

「みゅうッ!? 何でミュウは空を自由に飛んでいるのですの!?!」

ミュウの驚愕は当然である。ミュウウイングは本来、『飛ぶ』というよりは、『浮く』だけの力だったのだから……

つまり、上下に移動出来ても左右にはできないという、何とも中途半端な力だったのだ。

しかしミュウは今、自分の思うが侘に空中移動を出来ている。決してただ風に流されているだけとか情けない理由などではない。

「????」

頭にクエスションマークをいくつも浮かべて悩むミュウ。

しかし、いくら悩んだところでプチトマトサイズの脳ミソでは、この難しい見解を導き出すことなどできっこなかった。

だが、ミュウにも一つだけ理解できたことがある。それは自分が一番肌を感じたこと……

「ミュウの いや、ソーサリーリングの力がパワーアップしているのです……」

パワーアップしたミュウウイングの力によって、ミュウは楽々と山岳地帯を抜けた。

そして、お腹を空かせながら飛ぶこと数十分、ようやく街らしき景色が見えてきた。

「や、やっと食べ物に在り付けますの〜。長かったですの〜」

街を発見すると、ミュウは大喜びで急降下し、街の入り口の前で綺麗に着地した。

エンゲーブを彷彿させるような美しい農園が広がり、街の中央には噴水広場があるという豊かな街だ。

噴水広場の中央には、なぜか怖い顔をしたおっさんの石造がドーンと聳え立っている。

これさえなければとても好感の持てそうな街である。

早速街へ入ると、住人達による手荒い出迎えが待っていた。

「おい、なんだアレ？ 変な動物がいるぞ」

街の子供の一人がミュウを指差しながら言った。

「本当だ。モンスターには見えないな。サルか？」

「いや、あの顔はブタだろ？」

「サルブタっ！ あいつの名前はサルブタで決定」

ミュウは何もしていないのに、続々と野次馬達が沸いてきた。

「違うのです！ ミュウの名前はブタザルですの！」

野次馬が勝手に付けた名前に文句を述べるミュウ。

『ブタザル』というのは主人であるルークがつけてくれた名前。

名前の由来はルーク曰く『ブタとサルを足して2で割ったような顔をしているから』らしい。

そんな真意を知っているのかどうかは知らないが、ミュウはなぜかこの名前に執着している。

「おい、サルブタ……」

「だから違うのですの！ ミュウの名前は」

「これ食うか？」

そう言って差し出してきたのは、レーズン入りのクッキー。

「食べるのですの〜」

音符マークを付けてまで差し出されたクッキーに飛び付くミュウ。

「サルブタ、これも食え！」

「喉が渴いたでしょ？ サルブタちゃん、これをお飲み」

何もしていないのに、あちこちから押し寄せる食べ物のプレゼント攻撃。ミュウは頬を緩ませながらそれらを一つ一つ嬉しそうに受け取った。

「サルブタ、何か芸をやったらこっちのお菓子もあげるぞ」

そう言って男の子が差し出したのは、見るからに美味しそうなチョコレート。

「（あ、あれは、チーグルの森で流行っているボール型チョコレート）（いちご味）ですの！ あ、あれは何としてでもゲットしたいですの〜）」

流行りの品を見るや、ミュウの瞳に小さく炎が上がる。

決意に満ちた今なら、何でも出来そうな気がしてきた。

「一番、ミュウことサルブタっ！ 口から火を吹くですの〜」



のモノを見ているかのように引きつっていた。

「い、以上、ミュウの火吹きでしたの〜」

苦笑いを浮かべながら一礼をするミュウ。

そして、それが起爆となって、野次馬達の停止していた脳が再起動した。

「ば、化け物だあああああああつっ！」

「やつぱりモンスターだったんだ！ おい、保健所……じゃない、警備兵を呼べ！」

「この姿は我々を油断させるまやかしに違いない！ きつと正体は火吹き竜か何かだ！」

武器を用意してくる者、兵を呼びに行く者、石を投げってくる者、街人達は一丸となり一匹の共通の敵を前に行動を起こした。

どうやら仲間意識の高い街みtaiである。

本来ならば美しい人間愛に満ちている街と言つべきだが、ミュウにしてみればただの早とちり集団でしかない。

まあ、こうなった根源はミュウにあるわけだが……

「みゅうううううううつ！ ち、違うのですの！ 誤解ですの！ 皆さんに危害を与えるつもりは……ふがつっ！」

必死に弁解も虚しく、一人の子供が投げしてきたボール型チョコレート（いちご味）がミュウの鼻の中に見事命中した。

それに続き、街人達の怒涛の投擲攻撃が押し寄せてくる。

耐久力の低いミュウにとっては、石をぶつけられるだけでも大怪我を負いかねない。

さすがにもうこの場に留まることは不可能と察したミュウは、慌

ててミュウウイングを広げた。

「みゅみゅううっ！」「ごめんなさいです〜の〜！」

悲鳴に近い謝罪の言葉を残し、ミュウは慌てて飛び立ち、街を後にしたのだった。

第2話 またもやピンチ！？ 異世界は敵だらけ（後書き）

見てくれてありがとうございます！

今更ですけど文章見づらいのかもって思いました。

行間を挟んだ方がいいのかなあ……

その意見も含めて感想も待っています。

### 第3話 やっぱりピンチ!? VS 黒い人(前書き)

全く関係ないですけど、TOXの長編はまだ執筆に入れていません；

というかようやくプロットの作成に入った段階です。

ミュウの異世界冒険記が終わることに少しは執筆進んでいればいいのですが(汗

### 第3話 やっぱりピンチ!? VS 黒い人

「まったく、ヴァーゲスト様も適当だよな。この世界のどこかにあるソーサリーリングって物を持って来いだなんて……」

怪鳥プレスベルグにまたがり、大空を飛んでいる黒い鎧の男は面倒そうにぼやきながらため息をついた。

黒い鎧、黒い髪、黒いフェイスマスク、黒い槍……黒以外の色が見つからないくらい、全身真っ黒な装備で覆われたデーモン族の男、名はアザゼルといった。

「大体、先に探しに向いたはずのレプリカナイト達はどこで何してんだよ……あゝあ、面倒くせえ」

男はダルそうに欠伸をすると、ついにはプレスベルグの上で寝転がってしまった。

「『この世界のどこか』ってどれだけ範囲が広いんだっつーの！  
全く……見つかるわけが」

「こんにちは～ですの」

不意に背後から飛んできた妙な生き物に話し掛けられ、挨拶を交わされた。

「あつ、ども。こんにちは」

アザゼルも寝転がったまま、適当に挨拶を返す。するとその生き物は嬉しそうな笑顔を浮かべ、自分を追い越して空の彼方へと消えて行った。

アザゼルはその方向をボーッと眺めながら、感心したようにこう言葉を漏らした。

「最近のサルは空も飛ぶんだな……」

……

……

……

「……って、サルが空を飛ぶか〜っ！」

ガバツと身を起こし、自分のボケに自分でツッコんだアザゼル。

「大体、あのサル。なんで言葉を発することが出来やがるんだ！？俺の知らないうちに最近のサルは喋ることが出来るようになっていたってのか!？」

レッサー　ンダが立つくらいで騒がれるくらいである。

どこかの調教師が話題を集める為にサルに言葉を教えたという可能性も

……

……

……

「……って、んなわけねーだろ！　しっかりしろ、俺！ー！」

　周りにツッコんでくれる者がいないことが、こんなにも寂しいことなのだと思ひついた瞬間だった。

「そういえば、あのサル……腹に珍しい装飾品を付けていたなあ……まるでリングみたいな……」

……

……

……

「……って、アレがソーサリーリングだあああああああああああ  
あつー！ー！」

　アザゼルは慌ててフレスベルグに命令を与え、妙な生き物　三  
　ユウの去って行った方へ向けて、全速力で追い掛けていったのだっ  
　た。

「みゆううう、いつまで経ってもどこまで飛んでも、知っている場所が見えないのですの……」

空を飛んでいる時のミュウは、リングの第三音素の譜の輝きと連鎖して身体全体が緑色に変色している。

パワーアップしたミュウウイングの扱いにもようやく慣れてきた様子のミュウ。上空移動はそんなに疲れないのでかなりお気に召したようである。

「…………… てええええええつ！」

「みゆ？」

背後に声がした気がした。

今までの教訓から、背後からやってくる人影は自分にくる結果をもたらしていない。

ミュウは思わず警戒体制に入った。

「まてええええええええええいいつ！ そのサルうううううううつ……」

「みゆ？ さっきの黒い人ですの」

正確に言うと、人ではなくデーモンだったりするが、ミュウはそのことに気付いていない。

男の表情からは、何か尋常ではない様子が伺えた。

「ど〜う〜し〜た〜です〜の〜？」

まだ距離があった為、大声を上げて訪ねるミュウ。すると男は





「ちっ、直撃は間逃れやがったか……まあいいか、サルは落としたし」

アザゼルはフレスベルグの動きを止めると、ミュウが落ちて行った森をじーっと見つめながらこう呟いた。

「しっかし……落としたのはいいが、この森　いや、樹海だな、これは。これから落ちたサルを探し出すのもまた一苦労だな。面倒くせえ」

どうやらアザゼルの『面倒くせえ』は彼の口癖のようである。

彼の無頓着な性格が口癖になってよく表れている。

しかし、彼は面倒くさがっている割には、結局のところ責務はちゃんと果たすのである。

アザゼルは物凄く嫌そうな顔をしながらも、しぶしぶミュウが落ちて行った付近の樹海へと飛び込んで行った。

「むっ……あれは……」

アザゼルが森へ飛び込んで行く様子を偶然遠目で見ていた女性がいた。

「確か、ヴァーゲストの側近の男……なぜ、このような樹海に……？」

金髪の女性はアザゼルことを知っているような口振りだった。

獲物を威嚇するかのような鋭い眼光から、どうも彼のことを好意的には見ていないようだ。

「行ってみるか……」

決意を固めた女性は腰から二丁の譜業銃を取りだし、辺りを警戒しながら深い樹海の中へと足を踏み入れていったのだった。

### 第3話 やっぱりピンチ！？ VS 黒い人（後書き）

見てくれてありがとうございます！

今回は短いかもしれませんがこれで終わりです。

明日もたぶんこのくらいの時間に更新します。

#### 第4話 早すぎる再会（前書き）

こんな駄文の小説をお気に入り登録してくれた方がいるようでっ！  
とてもとても嬉しいです。本当にありがとうございます！！  
素直に励みになりました。これからも更新がんばっていきます！



か自力で岸まで泳ぐことを試み始めたのであった。

岸までほんの三十メートル程であったが、ミュウには数百メートルの距離に見えたに違いない。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……、や、やっと岸に辿り付いた……ですの〜」

ようやく地に足を着くことができるようになると、ミュウは水に濡れた犬みたいに身体をプルプル振って水気を飛ばした。

泳げないミュウを救ったのは、例の形が少しおかしくなったソーサリーリングである。

別にまた不思議な力を発したとかそういうわけではなく、ただ単に浮力の働いたリングが偶然浮き輪変わりになり、泳げないミュウでもバタ足のみで岸に辿り付くことができたのだ。

「そ……それにしても今日は厄日ですの〜。怖いモノに追われてばかりですの〜」

スケルトン、レプリカナイト、そしてアザゼル。

今日一日だけでミュウは三度も絶体絶命の淵に立たされたのだ。しかも襲われる度に相手は強い者へと変わってきている。

この後、また何かに襲われたらと思うと背筋がぞくつとする。

「みゆうううう……耳が痛いですの〜……」

先ほどアザゼルの譜術がまともにウイングへ命中していた為、左耳にうつすら黒い傷跡が残っていた。

大事には至らなかったが、その傷口は結構深い。とても再びウイングを広げられそうにはなかった。

当然ながら、ミュウには回復譜術は使えない。それどころか回復アイテムすら携帯していなかった。

「仕方ないですの。歩いて森を抜けるしかないですの」

この場に居ても、またあの黒い男に襲われ兼ねないと思ったミュウは、ケガをした左耳を引きずりながら、よろよると湖を後にしたのだった。

ミュウの予想通り、その場を離れていった自分と入れ違いに、フレスベルグに跨がったアザゼルが空から降下してきた。

「ちっ、水しぶきの音がしたからここだと思ったんだが……いねえか」

ミュウの運が良かったのか、アザゼルのタイミングが悪かったのか、湖に降り立ったアザゼルの視界にミュウの姿はなかった。

「この樹海じゃ空から探すのは無理だな。しかたねえ、面倒くせえが歩いて探すしかねえか」

そう呟くとアザゼルはフレスベルグから降り、地に足を着いた。相当ダルいのか、肩をコキコキ鳴らし、欠伸を交え、ついには尻を掻きながら、ゆっくりとした足つきで樹海の中へと姿を消した。

ちなみに命令を受けていないフレスベルグは、主人の命が下るまで、いつまでもその場で待機し続けるのであった。

夕日が傾き始める。

この時間になると、この森の植物達はオレンジ色の光を浴びて、黄金色の草花へと変容する。

それは強暴なモンスターですら魅了されるほど、幻想的で、そして美しい光景だった。

その光景を見た者達は必ず何らかの情緒を感じるといふ。素直に感動する者も居れば、寂しさを感じる者も居る。今のミュウはその後者だった。

この光景はチーグルの森でも毎日のように見れた。いや、チーグルの森でなくてもこの夕日が作る幻想世界は大好きだった。森の仲間達が……共に旅をした仲間達がいつも近くに居てくれたから……

共に感動できる者が常に隣に居てくれたから……寂しさを感じないで済んだから……夕日の景色が大好きだった。

だけど、今のミュウはたった一人。この黄金色の世界にたった一

人であることを強く実感した。

それと同時に仲間達の存在が、如何に大きいものであったかを改めて認識した瞬間でもあった。

「「はあ〜……」」

場の雰囲気にもぐわない『二つ』の深いため息が綺麗に同調した。そしてそれぞれのため息の主達は、肩を並べて交互に愚痴を語り始めた。

「全く、あの黒い人までもリングを狙っていたなんて聞いてなかったですの……」

「全く、ソーサリーリングが動いているなんて聞いてなかったぜ……」

「早い内に安全な場所に避難しないと、また別の誰かに襲われるかもしれないですの……」

「早い内にあのサルを見つけれねえと、他の奴に先を越されちまうじやねえか……」

「大体なんでリングが狙われるのですの？」

「ああ、それはリングを見付けたものだけに特別に装置を使わせてくれるというヴァーゲスト様の粋な計らいが……」

「「ん？（みゆ？）」」

……

……

……



オーラを放つ。

六神将やヴァン総長がそうだったように……

しかし、そのオーラを感じていたのはミュウだけではなかった。

「（なんだ？ こいつの奥底に感じる強大な力は？ リングの力がサルの身体に同調してやがるのか？）」

相手は自分を見てこんなに怯えているのに……相手はただの小動物のはずなのに……アザゼルの槍を握る手に汗がにじみ出していた。

「（ちっ、何だかしらねえが、戦うと面倒なことになりそうな気がするぜ……仕方ねえ、こういうのはあまり好みはしねえんだが……）」

何を思ったのか、アザゼルは構えていた槍を背中にしまい、臨戦体制を解いた。

「おい、サルっ！」

「みゆうっ！ ミユウの名前はブタザルですよ！」

「同じようなもんじゃねえか！ キレル意味がわかんねえし！ ……まあいい。おい、サル！ 俺と戦いたくねえか？」

一見挑発しているようにも取れる言葉、アザゼルはまずミュウに戦意の有無を確かめる質問を投げた。

「戦いたくないですよ」

「即答かよ……まあいい。戦いたくねえんだな」

「戦いたくないですよ」

「（二回言っただっ！？）……そ、そうか……じゃあ、その腹に着け

ているリングを俺によこせ。そうすれば俺もすぐにこの場から消えてやる。お前の命も見逃してやる」

「それは困るですの〜」

ミュウはお腹のリングを『渡してたまるか』と言わんばかりに、小さな手で押さえつけ、大事そうに抱え込んだ。

ソーサラーリングは単に火やアタックを出せるだけのアイテムではない。人と話すための翻訳機変わりにもなっているのだ。

つまりソーサラーリングを失うことは人との意志の疎通が取れなくなるということ……主人やその仲間達とも話が出来なくなるといふことも意味していた。

「よし、じゃあこうしようじゃねえか」

アザゼルはにやりと口元で笑みを浮かべると、ミュウにある打開策を持ち掛けてきた。

#### 第4話 早すぎる再会（後書き）

見てくれてありがとうございます！

言われるまでもないと思いますが、アザゼルはオリジナルのキャラです。

今、『アザゼル』ってきくと、『○んできますよ、アザゼルさん』の方を思い浮かべてしまう…w  
アニメ、よかったなあ。

## 第5話 魔弾襲来（前書き）

たぶん、僕はこのサイトの仕様を半分も使いこなせていない気がします。

イラストを挿絵みたいに使っているアレはどうやるんだろう……

## 第5話 魔弾襲来

「サル……お前、俺と一緒にこないか？」

その打開策はミュウにも想定外だった一言。

ミュウが目を見開いて驚くほど意外な一言だった。

「リングを渡したくねえなら、お前も一緒に来ればいい。俺の目的が果たされるまでお前の身柄は保証する。どんな敵からも守ってやるぞ」

「みゅみゅうつ！？」

さらに意外なことに、それはなかなか魅力的な提案だった。

今日だけで三回近くも敵に襲われているミュウにとっては非常にありがたいものであり、心強い。

ミュウの心境は今大きく揺らぎ始めた。

この男に完全に気を許したわけではない。

しかし、これ以上この見知らぬ土地で一人でいることは嫌だった。

そして、ミュウの決断は下った。

「分かりま」

「……ホーリーランスー！！」

「「……っ！？」」

ミュウがまさにアザゼルに気を許そうとした瞬間、近くの叢から

光の矢を降らす譜術が放たれてきた。

光の矢はアザゼルの右肩に深く突き刺さった。

あまりにも突然な奇襲だったので、さすがの彼も避ける間もなかったのだ。

「くっ！ 何者だ！？」

肩に手を沿え、痛がりながらも、叢にいる奇襲者に呼びかけるアザゼル。

しかし、すでにそこには誰も居なかった。

「みゅみゅうっ！？」

後方でミュウの悲鳴が上がる。

アザゼルは慌てて振り向くと、そこには金髪の女性がミュウを抱え、尋常ではないスピードで連れ去ろうとしていた。

「ちいっ！ させるかよ！ …… 光龍槍っ！！」

アザゼルの黒槍が無光属性の光線を放つ。

突き出された黒い光線は、奇襲者の後部目掛けて真っ直ぐ発射されていた。

しかし、奇襲者の次なる譜術詠唱はすでに唱え終えられていた。

「レイジレーザーっ！」

奇襲者の右手から、前方に貫通する眩い光線が発射された。

無光属性と光属性の光線同士がぶつかり、共に威力を中和し合う。そして、ほんの一瞬だが爆発的な光が辺りを照らし散らした。



いきなり連れ去られたミュウは、金髪の女性の信じられないほどスピードを保った激走に、目を回しながらひたすら悲鳴を上げまくった。

「静かにしろ！ さっきの奴にこの場所が気付かれるだろうがっ！」

金髪の女性に叱咤を受け、少し静かになるミュウ。

それでもジェットコースターみたいな激走には悲鳴を上げそうになる。

女性は先ほどの攻撃でアザゼルを仕留めきれていないことを前提みたいな表現をする。

彼女は彼の実力をかなり高い評価で見ているらしい。

ようやくジェットコースター感覚に慣れてきたミュウは、ここで初めて女性の顔をちらっと見た。

「……っ!？」

そこにはとても意外な、そして懐かしい人物の顔が在った。

「あゝ、いてえ。思いつきり頭打ったじゃねえか」

二本の木に下敷きになったはずのアザゼルは、まるで何事もなか

ったかのように木を払い除け、脱出に成功していた。

しかし、その表情には危機迫る雰囲気を漂わせており、明らかに怒りを奮闘させていた。

「あの女、絶対許さねえ。おい！ フレスベルグ！ 空から追跡するぞー！」

……………しゅん。

「おい、フレスベルグ！？ てめえ、聞いているのか！？」

……………

……………

……………

「……………って、あゝっ！ フレスベルグを湖に置いてきちまったああああああっ！！！」

今の今までフレスベルグが傍にいなかったことに気付かなかったアザゼル。

フレスベルグは今も湖で彼の帰りをいつまでもいつまでも待っていることだろう。

「よしっ、ここまでくればさすがの奴も私達を見つけられまい」

女性はあれから約1時間弱、休憩無しに樹海の出口付近まで走り続けた。

女性とは いや、人間とは思えない程の体力の持ち主である。

しかも本人は終止涼しげな表情を崩さず、疲れた様子を一切見せていなかった。

女性とミュウは出口近くの洞窟に身を潜めている。

仮にアザゼルが空から追跡したとしてもこの場所なら見つかることもないだろう。

「なんで……なんであなたがこんな所にいるのですの？」

ミュウにしては珍しく真剣な表情で、女性に質問を掛ける。

「そんなことよりもお前、そのリング」

「今はこっちが質問をしているのですのっ!!」

更に珍しいことに今度は叱咤するミュウ。

ここまでシリアスなミュウは果たして年に何回見られるだろうか？

「分かった、先に質問に答えよう。あの黒装の男は、私が今調べている重要参考人の一人なのだ。そして、先ほどあの男が森に入っていく姿を見たもので………気配を消した後を」

「そうじゃないのですのっ!」

バチンバチンと、小さな手で地面を叩いて苛つくミュウ。

どうやら彼の聞きたいことは別にあるらしい。

「どうして死んだはずのあなたが、こんなにピンピンして生きているかを聞いているのです〜!」

.....

.....

.....

「.....お前つ、ティア達と一緒にいたチーグルではないか!」

「今更気付いたのです!?!」

女性はようやくその事実気付くと、初めて表情を崩し、驚きを見せた。

「なぜ、お前がこんな所に?」

「だ〜か〜ら、今はミュウが質問しているで〜す〜の〜!」

お互いに聞きたいことが多すぎて混乱を招いている。  
そして、ついにミュウが叫んだ。

「だから、何で死んだはずのリグレットさんが生きていますの〜  
〜っ!?!」

## 第5話 魔弾襲来（後書き）

見てくれてありがとうございます！

次回から後書きでちよこちよこつとスキット（TOAではフェイス  
チャットだっけ？）を入れていきます。  
ちよつとしたお遊びみたいなもんです。

## 第6話 グラン・ソウル（前書き）

世界観の説明とリグレットのツンデレ回です。

世界観の方は5秒程度で思いついた有りがちすぎる設定です。

なんかのアニメでこんな設定の世界があったなあ……題名忘れたけどw

## 第6話 グラン・ソウル

ローレライ教団兵『神託の盾騎士団<sup>オラクル</sup>』の幹部『六神将』。  
並外れた実力を持つ六人で構成され、その個々の力は圧倒的であった。

皆、それぞれに思念を抱き、過去にルーク達と何度もぶつかり  
そして破れた。

そして、この『魔弾のリグレット』と称された女性も、栄光の大地エルドラントにて、過去の教え子であるティアと価値観を噛み合わせぬまま敗北し、命を落とした　はずである。

「お前、この世界のこと何も知らないのか？」

「みゆうっ！ ミュウだって世界のことくらい知っていますの！  
この世界はオールドドラントと言って、キムラスカ国とマルクト国  
を中心に平和を守っているのですの〜」

かつては平和条約で結ばれていた二国は、表面的だが友好を保っていた。

しかし、ある事件をキツカケにその平和条約は解消され、対立国  
として永きに渡ってきた。

だが、ルークを筆頭にその仲間達の提案で、再び同盟は結ばれた。  
今度は表面だけの友好ではなく、互いに手を取り合い、永久に協力し合う誓いが交わされ、オールドドラントに更なる平和が訪れた。

ミュウの説明はものすごく手抜きではあるが、言っていることは  
間違っていない。むしろミュウにしては博学な言葉を口にした方だ  
ろう。

だが、リグレットはミュウの解答を聞いて、なぜか深くため息を

吐いた。

「なるほど、何も分かっていないみたいね」

「みゅみゅっ!?!」

いともあっさり自分の意見が覆され、驚き半分、へこみ半分のリアクションを返すミュウ。

そしてリグレットは更に驚きの事実を述べ始めた。

「この世界はオールドドラントではない」

「チーグル、お前は人が死した後、どこへ行きつくとと思う?」

不意に放たれた質問、それは哲学の域を越した高度な質問。そして、誰もが知りたいことでもあった。そ

ミュウは眉を寄せ、『むむむ』と唸りながら、じつくりと自分なりに考えをまとめ……答えた。

「火葬場ですの〜」

なぜか嬉しそうに答えるミュウ。

その解答を聞いてリグレットは一瞬コケそうになる。

「そうじゃなくて……いや、その通りなのだが………し、質問を変えよう」

リグレットはゴホンッと咳払いを入れ、間を作ると、改めてこう質問をした。

「人が死に、肉体を離れた魂の行きつく場所、それはどこだと思っ  
？」

博識なリグレットとしては非常に分かりやすく質問したつもりだが、ミュウにはこれでも質問の主旨が理解できていなかった。

「墓地ですの〜」

二度目のミュウのポケ解答に、リグレットは鎮痛の表情を浮かべる。

結局彼女はミュウの言葉はスルーして、話を先へ進めることにした。

「……………つまり、この世界は生前に思念を果たせなかった魂が行き着き、生前の肉体へと再構築される場所、それがこの死霊世界『グラ  
ン・ソウル』よ」

「……………みゆ？」

長い間の後、ミュウは思考の末、結局首を傾げた。

まだよく分かっていないみたいである。

その反応に、非常に疲れた表情でため息を漏らすリグレット。

「もういい。つまり、この世界は異世界なの。今はそれだけ覚えてもらえばいいわ」

結局の所、ミュウにも分かるように簡単な説明で済ますリグレッ

ト。

その口調にはいつもの堅苦しい軍人らしさは見え、素のリグレットを映し出していた。

「みゆううつ。よく分からないけど、わかりましたですの〜」

「（こゝ、ここまで簡単に言っても分からないとは……）」

どうやら博識なリグレットにとって、ミュウという存在は苦手意識を持たせる相手らしい。

久方ぶりにどっと疲れたリグレットは、岩の壁に背をあずけ、しばらく火の番に集中することにした。

日は完全に沈み、夜の深い闇の中、静寂と獣の咆哮が交互に樹海の音帯を支配していた。

ミュウ一人だったら怯えて震えていたかも知れない。

しかし、今のミュウにはその恐怖感に襲われることはなかった。

「チーグルよ。勝手に連れさらってきてしまった手前悪いのだが、お前を『モーヴ』という都市に連れて行きたいと思う。こっちの勝手な都合だが」

「分かったですの〜 リグレットさんに着いて行くですの〜」

リグレットが話を言い終える前に、ミュウは即了承を下した。

この反応にはさすがに意外だったのか、リグレットは目を見開いて、驚きを表情に出していた。

そしてリグレットはずっと気になっていたことを聞いてみることにした。

「お前、なぜ、かつて敵だった私を見ても警戒しない？ アレだけお前達の行く手を阻んできたというのに」

そう かつてルーク達と六神将は互いに剣を交えた宿敵同士、つまりミュウとも敵対関係であったはず。

なのにミュウは警戒する所か、完全に心を開いていた。

ミュウはリグレットと真っ直ぐ向き合つと、笑顔を向け、心意を述べ始めた。

「ティアさんが言っていたですの。リグレットさん本当はとても強く優しい人で、最も自分が尊敬している人だつて」

「ティアが……？」

「ミュウもそう思うですの。リグレットさん、とってもとっても優しいですの。」

屈折の無い笑顔で本心を述べるミュウ。

リグレットはその言葉を聞いて、少しだが頬を赤らめた。

「なっ……わ、私がいつお前に優しくした！？ 心にも思っていないことを言うなっ！」

「そんなことないですの。リグレットさん、ミュウに一生懸命この世界のこと教えてくれたですの。」

「その割には全然理解していなかったではないか！ も、もういい！ 寝るぞ！ 明日は早いんだ！」

なぜ明日『早い』必要があるのかは全くの謎だが、リグレットはミュウに背を向けるとそれっきり黙りこくってしまった。

ミュウはそんなリグレットの様子を見て一瞬微笑むと、その場にゴロンと転がり、すやすやと寝息を立て始めた。

久々にミュウに与えられた安らかな時間。

背中に感じられた安らかな温もりは、決して気のせいなんかではないだろう。

朝日が登り、森に咲く草花に太陽の光が降り注がれる。

朝の森は自然の賛歌のように澄みきった水のせせらぎの音がよく聞こえて来る。

リグレットはその音が目覚ましとなって、ゆっくりと眠りから覚めた。

彼女は髪を束ねながら、ちらつと横目で隣で寝ているミュウの姿を見た。

「（ヴァーゲストの側近の男は明らかにソーサリーリングを狙っていた……なぜだ？ なぜアレほどの男がこんなリングなんかを欲しがるのだ？）」

しばらくじーっと見つめていると、ミュウは一つ寝返りを打つ。

すると、ミュウの左耳に黒いアザがあるを見付けた。

「（なんだ？ ケガをしているではないか……あの男にやられたのか？）」

目に飛び込んできたのは、空中でアザゼルからフレームバーストを受けた時にできた傷跡だった。

一日で痛みは引いてきていたが、火傷の跡はこうしてくつきりと残されていた。

髪を束ね終えたリグレットは自分のカバンの中をこそこそ漁り始めた。

その時、ミュウも静かに目を覚ました。

「みゆううゝ、おはようですの〜」

「目が覚めたか。おい、ちょっとじっとしている」

「みゆ？」

リグレットの促された通りにミュウはその場でじっと固まってみた。

カバンから包帯と薬を取り出したリグレットは無言でミュウの左耳の傷に手当てを始める。

「みゆみゆっ？ 手当てしてくれるのですの？」

「じっとしてると言っただけ、口も動かすな」

リグレットの手当ては動きに無駄がなく、尚且つ丁寧な治療だった。

こう言った治療は慣れているのか、わずか数秒で完璧な包帯の形が出来上がった。

「みゆみゆう、ありがとうですの〜。やっぱりリグレットさんは優しいですの〜」

「ち、違う！ その汚らわしい傷跡を自分の視界から消したかっただけだ！」

明らかに照れ隠しが混じった言い訳を述べるリグレット。頬もほんのり赤い。

ミュウが改めてリグレットの優しさを感じた朝の一時だった。

「モーヴはこの森を出て真っ直ぐ西に行った所にある……が、ここは南の平野を迂回して遠回りしながら向かう」

身支度を済ますと、リグレットがこれからの予定は簡単に話した。

「みゆ？ 真っ直ぐ向かわないのですか？」

「ああ、ちょっと調べたいことがあるものでな。なるべくたくさん町へ寄って情報を集めたい」

「わかりましたですの〜 さっそく出発ですの〜」

話がまとまった所でミュウが先導して歩き始める……が、リグレットが冷静に待ったを掛けた。

「チーグル、森を抜ける道知っているのか？」

リグレットのその質問に、ミュウは極めて明るくこう答えた。

「知っているわけではないですの〜」

「笑顔で言うな！ 森は、ここから西に進めば抜けることが出来る」

「みゆみゆ〜うっ！ 西！ 分かったですの〜」

と、言いながら方向を変え、再び歩み出すミュウ。  
……が、リグレットが再び待ったを掛ける。

「そっちは北だ！ 言ってる傍から間違えるな！」

「みゅみゅうっ！ てことは西はこっちですよ」

「そっちは南っ！」

「みゅ、驚事実ですよ。北の反対は西ではなかったですよ」

驚愕を示しながらもミュウは再び別の方向へと歩み始める。  
当然リグレットは待ったを掛ける。

「だからそっちは北だと言っているだろうが！ お前わざと間違えてないか！？」

「みゅううう……この世に西が見当たらないですよ」

「お前が異常に方向音痴なだけだ！ もういい、お前は私が担いで行く、もう勝手に歩くな」

リグレットは一人オロオロしているミュウをひよいと拾い上げると、そのまま頭に乗せ、真っ直ぐ西へ向かって歩み始めた。

するとミュウは泣きそうな顔をしながら申し訳なさそうにこう言った。

「リグレットさん……」

「もういい、別にさっきのことは怒っていたわけでは」

「……後ろ髪がチクチク刺さって痛いですよ」

「そのくらい我慢しろっ！」

「みゅううっ」

リグレットに叱咤を受け、ミュウは彼女の後ろ髪のチクチク攻撃

に耐えながら大人しく悶えるのであった。

「ところでリグレットさん、そのモーヴって所に何かあるのですか？」

ようやくチクチク感覚に慣れてきたミュウは、今更ながらその質問を繰り返した。

「ああ、そこに我らが拠点にしている神殿がある。そして何か分かったらそこでラルゴと合流することになっている」

「誰ですか？ その人」

あまりにも酷いミュウのボケに、リグレットは思いっきり足を捻りコケそうになった。

ミュウが彼女の頭から落下しそうになるが、リグレットが慌てて空中キヤッチをする。

「私と同じ幹部六神将だった黒獅子ラルゴだ。巨漢で大鎌を持っていた……」

鎮痛な表情のリグレットの説明に、ミュウは手をポンツと叩いた。ようやく思い出したみたいである。

「思い出したのですか　あの大きくて地味な人ですか」

「（どういっつ覚え方を……）」

「どうやらミュウに取って黒獅子のラルゴの存在は、ただの『大きくて地味な人』としてしか認識されていなかったようだ。」

「みゆみゆっ！ 森の出口が見えてきたですよ〜」

ミュウの言う通り、前方には生茂る草木の終点となる地平線が見え始めた。

しかし、リグレットの瞳には、その異常な視力の良さから、地平線の先にあるものまで映し出されていた。

「ちっ、敵はあくまでも私達をこの森から出したくないらしい……」

リグレットが見たその先には、数十匹のレプリカナイト達が森を囲むように周りを徘徊する姿が在った。

## 第6話 グラン・ソウル（後書き）

「スキット」 【お前の名前は？】

リグレット「そういえばチーグル。お前の名は何というのだ？」

ミュウ「ミュウですの〜」

リグレット「……そのまんまね」

ミュウ「みゅっ！？ でもでもご主人様が着けてくれた名前もちやんとあるですの〜！」

リグレット「いや、別に聞きたくもない。これからは『ミュウ』と呼ばせてもらおうとする」

ミュウ「みゅうっ！ ひどいですの〜。もう一つの名前はよってもとっても格好良いですの〜」

リグレット「（はあ……）分かった、念の為に聞いておこう。あのレプリカが着けた名前は何か？」

ミュウ「『ブタザル』ですの〜」

リグレット「………やっぱりミュウと呼ばせてもらおうとするわ」

## 第7話 魔弾炸裂（前書き）

今回は初の戦闘回です。

第1話でミュウとスケルトンが戦っていたけど、あれはまるで戦闘になっていなかったのw

## 第7話 魔弾炸裂

アザゼルは笑っていた。

不敵に……鋭く

勝ち誇ったように……黒く

「くっくっくつ。あのサルと女、このままこの俺がたやすく逃がす  
とでも思っなよ」

一人、アザゼルは樹海の深部で大岩に腰を掛けて笑う。

「今頃は出口付近で予め呼び寄せていたレプリカナイトの大群を見  
て動揺しているだろうな……くっくっくつ……」

周りに誰も居ない森の深部で、男は不敵に独り言を漏らしながら  
笑っていた。

その光景は余りにも不気味な為、周りにいた獣達も引いてしまっ  
ている。

「そして奴らの姿を見つけ次第、ナイト達の報告を受け、俺がフレ  
スベルグに乗り、その場に直行する……くっくっくつ……抜かりの  
ない完璧な作戦だな」

……

……

……

「俺がフレスベルグと無事合流できていたら……の話だな」

アザゼルの顔には満遍なく疲労の色で塗りつぶされていた。リグレットの奇襲を受けた後、彼は自分の足跡を頼りに湖を目指したのだが、なぜか湖には辿り付けず、そしてどんだん樹海の迷宮へとハマって行った。

アザゼルの方向音痴ぶりは、まさにミュウと負けず劣らずといった感じだった。

「俺……これからどうしよう……」

誰も居ない樹海の深部……そこには一人で途方にくれる馬鹿な男の姿が悲しく映し出されていた。

そして、フレスベルグは今日も湖で主人の帰りを待つ。

「みゅううう。リグレットさん、どうするのです〜?」

ミュウ達はナイトに見つからないように近くの叢に身を隠しながら静かに様子を伺っていた。

徘徊しているナイトの数は半端ではない。この様子だと隙を見て脱出を図ることも不可能だろう。

「恐らく、奴らが私達を足止めしている間に、あの黒い装備の男が空からこの場へ直行してくる……たぶんそついう戦法ね」

さすがに鋭いリグレット。完全にアザゼルの仕組んだ戦法を読みきっていた。

しかし、さすがの彼女もアザゼルがフレスベルグと合流出来ていないことまでは想定していなかったみたいである。

そこまで想定できたらエスパーだが……

「レプリカナイト達に加えて、あの黒い装備の男まで合流されたらもうこちらに打開策はない」

「みゆみゆうっ!? じゃあどうしようもないのです!?!」

「いや、『合流されたら』の話よ。レプリカナイト達だけなら……むしろは黒い装備の男一人だけならまだ対処できる見込みはある」「みゆ? どういうことですか?」

リグレットの言葉の真意が理解できないミュウ。

いや、そもそも考えることは全てリグレットに任せていた為、自分で考えようとすらしていなかった。

「つまり、ここは正面突破で切りぬけ、出来るだけ遠くへ逃げる。空からの追跡には追いつかれるだろうが、ナイト達さえ撒ければ最悪でも奴との一対一の状況くらいは作れるだろう」

かなりの大胆な策にミュウは呆気に取られる。

しかしあの博識なリグレットが考えたことであるのだから、もう他に良策はないのだろう。

「この場はスピードの勝負よ。如何に早くここを切りぬけられるか……ぐずぐずしていると遠くへ逃げる前に奴と合流されてしまうからな」

リグレットはミュウを再び頭へ乗せ、スチャッと音を立てながら両手に譜業銃を構えた。

「ミュウ！ しっかり掴まっているのよっ！ お前が振り落とされたら元も子もないのだからなっ！」

「みゅみゅ〜うっ！ 了解ですのっ！ 絶対に振り落とされないですの〜」

ギュッとリグレットの頭にしがみ付くミュウ。

リグレットの気迫につられるように、彼の目も真剣そのものだった。

「よしっ！ いくぞっ！ー！」

その声を合図に、リグレットは叢から飛び出し、森の出口へ向けて一目散に走り出した。

「クラスターレイドっ！」

広範囲の地属性譜術が突然レプリカナイトの群がっている地点の足元に炸裂した。

「「「……っ!?」「」」

慌ててナイト達はその譜術が放たれた根先の方へと振り返る。

そこには物凄いスピードでナイト達の包囲網へと突っ込んでくるリグレットとミュウの姿があった。

ナイト達は標的を発見すると、即座に続々とその場に集結してくる。

その数はざっと五十は超えていた。

しかし、リグレットはそんなことお構いなしに突っ込んだ。

バンバンバンバンバンっ！

目にも止まらぬ早撃ちで正確にナイト達の急所を打ち貫く。

銃の威力が凄いのか、彼女の腕が凄いのか……攻撃を受けたナイトは一撃で地に伏せてゆく。

そして彼女の次なる譜術が唱えられた。

「エクレールラルムっ！」

ナイト達が集結してきた所を見計らって、十字の金光から光属性の光熱を放つ譜術を炸裂させた。

範囲もそこそこ広く、威力もあるので非常に使いやすい譜術。

これにはさすがに敏速のナイト達でも避け切れず、次々に光熱に溶かされていった。

威力があり正確に狙いを定めて敵を打ち貫く射撃と、隙の無く状況に適した判断で放たれる譜術、この二つをかね揃えたリグレットに、ナイト達は彼女に攻撃を与えるどころか、触れることすら出来ずにいた。

「みゆみゆっうっ！ さすがリグレットさんですの〜 爽快です

の〜

そしてミュウは、パワーアップしたリングの力を借りて一緒に戦う……と思いきや、ただリグレットの頭の上で何とも言えない爽快感を味わうのに夢中になっているだけだった。

リグレットはそのまま森の出口を掛け抜けた。ナイト達は彼女のスピードに着いて来れていない。

近接攻撃しか出来ないナイト達にとって、相手にスピードで負けてしまうと何もやりようがないのだ。

このままなら無傷で森を脱出できる！ そう思った矢先

「……………っ!？」

前方にはすでに譜術を唱え終えたレプリカルーンの大群が待ち構えていた。

レプリカルーン レプリカナイトよりも体力、耐久力では劣るが、譜術攻撃力は半端なく強い。

まさに超一流譜術者と変わりない戦闘力を持つといっても過言ではなく、ある意味ナイトよりも厄介な相手。

ただし、その譜術詠唱中には大きく隙が生じるため、譜術が放たれる前に倒せばそんなに苦戦しない相手でもある。

……だが、目の前のルーン達はすでに詠唱が唱え終えられていた。

「『イラプションっ！』」

レプリカルーン達の言葉が重なり、そして一斉に放たれる炎の譜術。

「くっ……」

渦状の火炎譜術が真っ直ぐリグレットを目掛けて飛んでくる。

バンバンバンバンっ！

リグレットはその火の渦に向けてひたすら早撃ちを繰り返す。

すると放たれた弾とぶつかった火の渦は、互いの威力に相殺され、次々に効力を失う。

相殺しきれなかった火の渦は何とか眼前で交わり、丸焼けにならずに済んだ。

想定外の相手を前にしても冷静な判断を失わず、リグレットはその攻撃全てを華麗に対処する。

後ろからはナイト達が追ってきている為、立ち止まることは出来ない。

リグレットはそのままレプリカルーンが群がっている前方だけを向いて、スピードを落とすことなく突っ込んだ。

ルーン達は譜術の再詠唱に入るが、それが唱え終わられる前にリグレット譜術が先に完成した。

「クラスターレイドっ！」

最初に放った譜術と同じものをルーン達の足元に炸裂させる。先ほどは奇襲用に放ったのだが、今度は攻撃用に討つ。

耐久力の低いルーンには威力の弱いこの術でも効果は抜群だった。

地属性譜術の激流に、ある者は詠唱を止められ、ある者はそのま  
ま地に伏せてしまう。

耐久力がないにも程が感じられる体たらくだった。

しかし、如何にこの術が範囲広しと言えど、すべてのルーン達を  
撒き込めたわけではない。

攻撃に撒き込まれなかったルーン達は、そのまま詠唱を唱え続け  
ていた。

リグレットは再び銃を構え、また譜術を相殺する姿勢を見せたま  
ま走る。

ぐいつ！

「……っ!？」

しかし、地に伏せていたレプリカルーンの一匹が不意にリグレッ  
トの足を掴み、彼女の体制を崩させた。

「……イラプションっ!」「」

その瞬間、ルーン達の譜術攻撃の第二派が一斉に放たれた。

## 第7話 魔弾炸裂（後書き）

「スキット」 【応援？】

リグレット「はあっ！ エクレールラルムっ！」

ミュウ「もぐもぐ（……………みゅみゅ〜う！ リグレットさん、さすがですの〜」

リグレット「食らえ！ ホーリーランスっ！」

ミュウ「もぐもぐもぐ（……………強いですの〜 リグレットさんは最強ですの〜」

リグレット「そこだ！ クラスタレイドっ！」

ミュウ「もぐもぐもぐもぐ（……………でもティアさんと技が被りすぎているのが……………もぐもぐ（……………少し残念ですの〜……………」

リグレット「……………ミュウ」

ミュウ「みゅ？ 何ですの？」

リグレット「何を……………しているんだ？」

ミュウ「何って……………もぐもぐ（……………応援ですの〜」

リグレット「菓子を口に含んだままか？」



## 第8話 たった一発の攻撃で（前書き）

土日は日中更新ができます。平日は夕方・夜限定ですけれど。

## 第8話 たった一発の攻撃で

「くっ………！」

慌てて体制を立て直そうとするリグレットだが、すぐ目の前には無数の火の渦が迫っていた。

バンバンバンバンバンッ！

先と同じように譜業銃の早撃ちにより数個の火の渦は相殺した。だが、いくら彼女が銃の名手でも、軽く二十を超える火の渦全てを相殺することは不可能だった。

「ちっ！」

足を掴まれているため、回避も不可能と悟ったリグレットは慌てて防御の体制に入る。

「リグレットさん！ 危ないですよ！」

リグレットの危機を察したミュウは彼女を庇うように前に飛び降りた。

同時にソーサラーリングが赤く変色する。それに同調してミュウの身体も赤くなった。

そう、これはリングの力を解き放つときに起こる前兆、今まで半分遊び気分だったミュウも、リグレットの危機を面してようやく本気になったのだ。

「ふぁいあ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~つ！」

「!

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

直径数メートルの豪火炎がミュウの口から放たれた。

大きさも、規模も、威力も、全てがルーン達の譜術よりも超越された炎。

その圧倒的な炎は、リグレットが襲われかけていた火の渦を全て飲み込み、物凄いスピードを保ったままルーン達のいる方向へと走った。

鈍足のルーン達には避ける術などあるはずもなく、あっという間に大火炎の中に撒き込まれ、墨になった。

「……………」

突然の出来事に啞然とするナイト達とルーン達、そしてリグレット。

「みゆみゆう！ リグレットさん、今がチャンスですよ〜」

ミュウの言葉にハッと意識を戻したリグレットは、自分の足を掴んでいたルーンの手を思いっきり踏んづけ解放されると、ミュウを頭に乗せ、再び走り出した。

しかしナイト達とルーン達はミュウの放った炎に恐れて足を動かさずにいた。それほどミュウの一撃は強大で恐ろしかったことを意味している。わずか一発で敵全体の戦意を喪失させるほど……

ナイト達はどんどん離れてゆくミュウとリグレットの姿を傍目にながらも、恐れを成して二人を追い掛けようとするものはいなか

った。

森を脱出してから数十分、リグレットはようやく走りを止め、一息吐いた。

それでも疲れた様子は見せていない。相変わらずとんでもない体力の持ち主だ。

「ここまでくればナイト達の追跡の心配もないだろう」

「みゆう！ さすがリグレットさんですの、レプリカナイト達の姿がもう全然見えないですの」

「(……すごいのは私ではなく、お前だ)」

ミュウは気付いていなかったが、彼の放った炎が威嚇効果を放っていた。

たった一発の攻撃で完全にナイト達の追跡意欲を失せさせていたのだ。

よって今回の立役者はリグレットではなくミュウであった。

「(ヴァーゲストがリングを欲しがる理由が少し分かった気がする……)」

あの炎の威力は六神将のリグレットですら驚愕するものだった。それほどリングに絶大なパワーが秘めていることがはっきりした。

「みゆう、それにしても黒い人はどうしたのですの？ 追っかけ

てこないですの〜」

ミュウは澄み渡った青い空をキョロキョロと見渡しながら言う。

「ああ。だが奴がこのまま我らを易々と逃がしてくれるとは思えない。いつでも万全の体力で戦えるようここからは警戒しながら歩いて行こう」

リグレットならもう一時間くらい走ったところで万全な体力をキープ出来そうな気もするが、念には念を込めて……と言っことだろう。

ミュウ達はそれからずっと周りを警戒しつつ、南に位置する街を目指すのだった。

一方、その話題になっている人物はと言っ……

「そういえば、どうやってナイト達から報告を受けるつもりだったんだ？ 俺」

樹海の更に深部へと歩み続けているアザゼルは、ふとそんな疑問を口に出していた。

アザゼルからナイト達へは念話で通ずることは可能だが、ナイト達からアザゼルへは……

「ダメダメだな……俺」

一人、卑下し落ち込むアザゼル。  
彼がダメダメだったことくらい、今更言われなくても皆分かっていることだった。

ぐうゝ

フレスベルグは今も湖にてお腹を空かせながら主人の帰りを待ち続けている。

リグレットとミュウは澄み切った満天の青い空をじーっと見つめ、  
呆然としながらそれぞれ呟いた。

「……追いかけてこなかったな」

「……追いかけてこなかったのです」

ずっと警戒しながら歩くこと小一時間、特に異変が起こらぬまま  
街の見える景色の場所にまでやってきた二人。

拍子抜けとはまさにこのことである。

「必ず追いかけてくると踏んでいたのだが、何を考えているのだから……あの男の真意が読めないわ」

アザゼルのポケ行動がリグレットの心中に大きな混乱を招いていた。

真意が読めないのも当然である。  
彼自身予測できなかった事態が、進行形で本人を襲っているのだから……

「首が痛いのですの〜」

ミュウが首をコキコキ鳴らし辛そうな顔を見ると、そのままリグレットの頭の上で倒れ伏せた。

小一時間ずっと空ばかりを見上げていたので首筋に痛みが生じるのも無理はない。

肩が凝ったのはリグレットもまた同じだった。

「とりあえず街へ入って先に宿を取ろう」

リグレットの提案にミュウも無言で頷くと、二人はゆっくりとした赴きで街の門の方へと向かった。

## 第8話 たった一発の攻撃で（後書き）

見てくれてありがとうございます！

それとお気に入り登録、評価を付けてくれた人ありがとうございます！

こんなにもPVが増えるとは思わなかったので、とても感動しております。

これからもモチベーションを保って、更新頑張れそうです。

## 第9話 おっかないおっさんの像（前書き）

お昼に更新する予定でしたが、少し用ができてしまい、いつもの時間の更新になってしまいました。

そしてサブタイトルがだんだん適当になってきた気が……（汗

## 第9話 おっかないおっさんの像

自由の街『リーム』。

この街の特徴は表と裏がハッキリと分かれている所だろう。街門がある南側の道が表通り、その反対の路地が裏通り。

表通りは農園や雑貨店など仕事に真面目な人間が集まり治安も非常に良い。今も子供達が元気に走り回っている。

しかし、問題なのは裏通り、ぎっしりと敷き詰められたように並ぶ建物は、酒場や博打施設など事業店が大半を占めている。

店間の競争が特徴的だが、お世辞にも治安が良いとは言いがたい。治安が悪くなれば店間の嫌がらせが始まったり、柄の悪い客が店の中で暴れたりと人生に暴落した人間が群がっていることが多い。

ミュウ達は今、表通りを歩んでいる。

しかし、なぜか彼らに街の住人達の視線が集中していた。

「みゆみゆ？　なんか見られている気がするのですの〜」

視線に気づいたミュウが辺りをキョロキョロしながら不思議そうに顔をしかめた。

対するリグレットはそんな視線など気にせず、平然とした表情を崩さぬのまま真っ直ぐ前だけを見続けている。

「ああ、なぜか私が入通りの多い街を歩くといつも視線が集中するのだ。まあ軍服を着たまま街の中へ入ったりしたらこの反応も当然だろう」

「みゆみゆ〜う、なるほどですの〜」

リグレットの言葉に納得するミュウ。  
では、ここで少し街の人達の心の中を覗いてみよう。

「（か、可憐だ……）」

「（あんな美人……今まで見たことがない）」

「（声かけちゃおうかなあ。ああ、でも遠くで見ているだけで幸せかも）」

視線の真意はそんな所だった。

妙に肌を露出している軍服に見えない軍服、長身でハイソックスにミニスカを履いた金髪美女。

こんな女性が堂々と街の中など歩いていたら視線が集まるのは当然の成り行きだった。

そんな自覚など微塵に感じていないリグレットは、これからも街の中を歩く度に視線を集め続けることだろう。

宿の予約を取り、しばらく自由行動ということになったが、ミュウは別段することがあるわけでもなく、そのままリグレットの頭の上に居続けていた。

チクチク感覚にも完全に慣れたミュウは、ここがお気に入りの場所になった様子である。

しばらくリグレットの頭の上でゴロゴロしていたミュウは、ふと前方にみたことのある造物を発見した。

「みゆみゆ？ あの怖い顔の石造、見たことあるですよ。」

目の前に飛び込んできた光景は、ミュウが前に立ち寄った街と同じように噴水の中央に堂々と聳え立つ怖い顔のおっさんの石造だった。

威厳のある容姿に二メートルを越す巨体、良い言い方をすると赴きのある風体とも思えるが、ミュウにしてみたら、やっぱりただの怖い顔のおっさんだった。

するとリグレットは石造を威嚇するように睨むと、この石造の人物の正体について語り始めた。

「……この男はヴァーゲストという名の男だ」

「みゆ？ ヴァーツラ」

「違う！ その間違い方だけはするな！」

すっかり別タイトルの敵キャラの名を言いそうになったミュウの口を慌てて塞ぐリグレット。

ゴホンッと咳払いを一つ入れて気を取り直すと、リグレットは再び語り続けた。

「簡単に言うところの世界の支配者よ。お前を襲っていた黒い装備の男も奴の仲間だ」

「みゆ？ つまり王様ってことですよ？」

「……違うな。王と支配者では全然意味合いが違う。奴はこの世界の均衡を崩そうとしている。言わば革命者だ」

リグレットの表情が更に曇って行く。どうやらリグレットはヴァーゲストという男に対して嫌悪を抱かなければならない事情があるようだ。

実は彼女、この街へ寄つた目的はこの石造の人物、ヴァーゲストの動向を探る手がかりを集める為だった。

「……………みゆ？」

一方で全く理解出来ていなかったミュウ。

彼にしてみたら少しでも難しい言葉が出てきた地点で、アウトらしい。

「もういい、詳しいことは『モーヴ』に着いてから話すとしよう。今は情報収拾が先だ。裏通りへ行くわよ」

石造であろうとヴァーゲストの顔は見たくないのか、リグレットは早足でその場を去って行く。

表通りに聳える一つの石像。

しかし、のどかな街並みの風景には余りにも場違いな雰囲気を感じていた石像だった。

表通りを抜けると、明るかった雰囲気が一転し、昼だというのに異様な暗さを放つ暗黒街が姿を現す。それがリームの裏通りだ。

道端で寝ているもの、酒を飲んでるもの、喧嘩を始めて殴り合っているもの……世の中の墮落者が集結した光景としては当然のものかもしれないが、やはり見えていて気持ち良いものではない。

ミュウはリグレットの頭の上で丸くなって怯えているが、対する

彼女はそんな風景に気を止めようともせず堂々と歩んでいた。

そしてここでもリグレットは大衆の注目の的となっていた。表通りと同じように遠くて眺めている人がほとんどだが、中には声を掛けてくるものもいた。

「よー、ネーちゃん……ヒック……ものすごい美人だな……ヒック……俺と一緒に酒場で杯をかわさねえか？」

明らかに『僕、酔っ払ってます』と言わんばかりの男が声を掛けてくる。

しかもまだ飲み足りないのか、リグレットを酒場に誘ってきた。ある意味強者かもしれない。

リグレットはもちろんそんな誘いなど軽くあしらう……と思いきや、彼女から出た言葉は意外なものだった。

「酒場、か。いいだろう、案内しろ」

リグレットは意外にも肯定を示した。これにはミュウも声を掛けてきた男ですらも驚愕していた。

「ふっ。女はそうこなくつちな。ネーちゃん、こつちだ」

男は嫌らしく笑みを浮かべると、手を招いて彼女を誘導しながら先導した。

ミュウはリグレットの肩にピョンと飛び移ると、そのまま彼女に耳打ちをした。

「（リグレットさん、いいのですか？ ああいう男の人が好みですの

「？」

「（そんなわけないだろう！ ……酒場は情報の溜まり場でもあるからな。それに何故かこういう輩は重要な情報を隠し持っていることが多い）」

「（みゅうう。でもなんだか危なそうな雰囲気ですの〜）」

「（まあ、これほど下落した暗黒街だ。少しくらい発砲騒ぎになった所で特に問題はないだろう）」

「（みゅみゅっ！?）」

さすがに発砲騒ぎは不味い気がするのだが、リグレットの目は本気だ。

つまりそういう事態も有り得ると言うことだろう。

「ネーちゃん……ヒック……ついたぞ。ここが酒場だ」

「そうか、ご苦労だった」

ガンツ！

「はう……っ！」

酒場に着いた途端、この男にはもう用済みと言わんばかりに、彼の後頭部を譜業銃の柄でぶん殴るリグレット。

当たり所が悪かったのか、それとも彼女が狙ってやったことなのか、男はその一撃で気絶し目を回しながら地に伏せた。

「よし、行くぞ」

「（……着いてくるんじゃないかったですの〜!）」

リグレットの大胆行動を目の当たりにしたミュウは、早くも後悔の念に浸るのであった。

## 第9話 おっかないおっさんの像（後書き）

見てくれてありがとうございます！

そろそろ9話分全部見直してみ、誤字脱字を修正していこうかと思えます。

サブタイ横に（改）がたくさんついていても内容は変わっていませんのでご安心を

## 第10話 桃色の髪と黒い導師服（前書き）

実はというと僕、TOAのサブクエを結構見逃しながら一回クリアしただけなんですよね。

なので物語に変な矛盾が出てきてしまうかもしれませんがご了承ください承を。まあ、異世界を出している時点で矛盾もなにもないんですけどねw

## 第10話 桃色の髪と黒い導師服

店内はある意味予想通りの墮落っぷりだった。

酔った男が酒瓶を片手に暴れていたり、周りの客に絡んで喧嘩になつていたりとまさに酒乱の地獄絵図。

現在もゴロツキ達によるパイ生地を用いたドッチボールが開催されている。

ミュウ達はそんな最中に酒場のドアを潜った。

リグレットはドアを潜ると、何の前ぶれもなくいきなり譜業銃を構えた。

「おい、ゴロツキ共。ケガをしたくなかったらヴァーゲストの動向について知っていることを全て話せ」

「（いきなり脅しですのっ!?!）」

彼女が先ほど言った通り、いきなり発砲騒ぎの前兆を……しかも自分から見せるリグレット。

ある意味ゴロツキよりも性質が悪いかも知れない。

しかし、大半のゴロツキは彼女の脅しに全く動じていない様子だった。

「はっ！ そんな風に銃を向けられることなど、こっちは日常茶飯事だな。そんなんじゃ全くビビんねんだ……よっ！」

セリフを終えるのと同時に、リグレットに向けてパイ生地を投げ付けるゴロツキ。

それが基点となって、周りにいたゴロツキ達も次々に生地を投げってきた。

リグレットは余裕でその全ての投擲を交わす。軽やかなステップで、右へ、左へ、下へ……

「おぶっ！」

だが、リグレットが下へ避けた瞬間、彼女の頭の上に居たミュウの顔面に見事パイ生地が命中した。

「すまない。お前が居たの忘れていたわ」

「忘れてた……じゃないですよ〜！ リグレットさん酷いですよ〜」

顔を生地塗れにしながら涙目で訴えるミュウ。

「分かった分かった。とりあえずこれで顔をふけ」

そう言い、どこから取り出したハンカチを手渡し、ミュウを氣遣うリグレット。

「みゅう。ありがとうございます〜」

リグレットの厚意を素直に受けとるミュウ。

やはり彼女、ミュウの前ではたまに優しい一面を見せる。

「それと、顔を拭くときは頭から降りてくれ。私の髪にパイくずが付く」

「みゅみゅっ!?!」

そう言つと、ミュウが自ら降りる前にリグレットは彼の耳を引っつかみ、少々乱暴に地面へ投げ捨てた。

優しいリグレットはほんの一瞬にして、閃光のように消え失せて

いたのだった。

ミュウが床に降りて顔を拭いている最中にも、ゴロツキ達の怒涛のパイ投げ攻撃は続いていた。

当然、一発も当たる気配はないのだが、いつまでも鳴り止まないその攻撃にリグレットは痺れを切らし始める。

「仕方ない。脅しではなく、本気だということを少し示してやろう」

そう言い放つと、リグレットは宙に飛び回るパイを一眼し、両手に構えた銃の引き金に指を掛けた。

バンバンバンバンバンっ！！

相変わらず見事な早撃ちが店内に炸裂する。

そして、弾道は全て空中に投げ放たれていたパイに命中し、生地は粉と化して床に散らばった。

「「「.....」」」

信じられない神業を目の当たりにしたゴロツキ達は、口を開けたまま目を見開いて固まった。

室内に充満する沈黙、その均衡を解いたのはミュウだった。

「おぶひゅあっ！」

黙する室内の中、ミュウの悲鳴に近い声が響いた。  
見ると、リグレットが粉にしたパイ生地を今度は頭から被っている彼の姿があった。

頭上に飛び交うパイが粉になれば、当然床に座っていたミュウはその粉くずを頭から被ることになる。

ミュウにしてみれば突然大量の粉が頭から振ってきたようなものだ。

「……リグレットさん」

今度は粉まみれになりながら、再び哀みの目でリグレットを見つめるミュウ。

その表情からは少々怒気も放たれていた。

「さあ、この床に散らばるパイみたいになりたくなかったら、知っている情報を全て話すのだな」

「（無視ですの！？）」

極自然にミュウの存在をスルーして、話を先へ進めるリグレット。よく見ると、彼女の頬に一筋の汗が流れていた。

彼女なりに『やってしまった』と思う所はあるらしい。

しかし、チーグル相手に頭を下げるのはプライドが許さないのか、リグレットはなるべくミュウの姿を視界にいれないようにしている。俗に言う『気付かないフリ』である。

「か、格好良い……」

突然、ゴロツキの一人がポツリと言葉を漏らした。

それに連なって、他のゴロツキ達も次々に心中を言葉に漏らし始

めた。

「美しい……」

「（ぼーっ……）」

リグレットの銃技とその美しい容姿に見惚れ、次々と頬を朱に染めてゆく男共。

そして、ここから怒涛の自己アピールタイムが始まる。

「姐さん！ 俺の持っている情報、全て教えます！」

「いやいや、姐さん！ 俺の方が良い情報を持ってまっせ！」

「バカ言え！ 姐さんに情報を与えるのは俺に決まっているだろ！」

リグレットのことを『姐さん』と称して、彼女に詰寄ってくる男共。

このコントみたいな状況に当のリグレットはただ困惑とするしかなかった。

「なるほど。街の中にまでヴァーゲストの手駒が徘徊しているのか」

リグレットの睨んだ通り、ゴロツキ達はたくさんの貴重情報を隠し持っていた。

彼女は奥にあるテーブルに腰を掛け、一人一人ゴロツキ達的情報を丁寧に聞き入っていた。今の男でもう四人目だ。

話を終えると次の男が新たな情報を語る。一人一人の話が長いの

で、彼女の席の後ろには『姐さん待ち』と称される情報屋達の列が連なっていた。

もはやリグレットの魅力に酒場中の男を虜になっている……と、思いきや、一人だけカウンターの奥でつまらなそうにしている男がいた。

「（けっ、何が姐さんだよ。俺の店は客の気性の荒さが売りだったのに）」

そう、この酒場のマスターだ。彼はつまらなそうに舌打ちをしなからリグレットを睨み続けている。

「（オマケに俺の店をメチャクチャにしやがって……あゝ。くそ！ムシヤクシヤする！）」

店がメチャクチャだったのは彼女が店に入る前からだったはずだが、マスターは何か彼女に因縁を付けないと気が済まなくなっていた。

そんなマスターの視界にふとある珍物の姿が目に入った。

「（ふっ、こいつは使えるかもしれねえなあ）」

マスターが嫌らしく浮かべる笑みの先には、勝手に店の料理を食べ始めているミュウの姿があった。

一方リグレットの方はようやく一段落つけそうなくらい情報屋の人数を消化していた。

数十人から得た情報を彼女は一言一句逃さず記憶していた。これにはさすがのリグレットにも疲労の色が見え始めている。

そしてついに『姐さん待ち』の列は無くなり、最後の情報屋が彼女と対向して席についた。

「俺の情報なんですけど……いや、情報とは言いがたいかも知れませんが、昨日、妙な女が俺の店に訪ねてきたんすよ」

どうやらこの男は情報屋ではなく、どこかの店主らしい。

「どんな女だ？」

リグレットが聞き返すと、彼はゆっくりと真実の回想を語り始めた。

「女……というより、子供だな。年は十そこそこくらい……そのガキが俺にこう訪ねてきたんすよ。『ソーサリーリングという響律付を見たことはないか？』ってね」

「（やはり、ヴァーゲストは部下を総導出させてリングを探しているのか）」

ある意味リグレットの予想通りの情報。

しかしこの後、男は思いも寄らぬ情報を語り始めた。

「相手はガキだから適当にあしらおうと思ったんすけど……そのガキ、後ろにライガとフレズベルグなんて連れてやがった。もう俺は腰が引けちまったよ」

その言葉を聞いた瞬間、リグレットは思いつきり表情を強張らせた。

そして迫るように男に詰寄ると、緊迫した表情のままこう聞き返す。

「……………っ！？　おい！　その女の特徴は！？　外見はっ！？」

「と、特徴っすか？　長い桃色の髪に……………黒い導師服を着ていたな。妙に根暗なガキでヘンテコなヌイグルミみたいなものを抱いていました」

「……………っ！！」

微妙に曖昧な特徴表現だが、リグレットに取っては確信的な言葉だった。

「（まさか……………まさか……………でもなぜだ？　なぜアイツがリングを探る必要があるのだ？　……………ま、まさか……………）」

リグレットの表情は動揺からか曇っていた。確証があるわけではない、だが男が言った特徴の全てに彼女の知り合いの姿が当てはまっていた。

「（詳しく調べる必要があるな）。情報提供感謝する！……………ミュウ、行くわよ！」

ガタンと音を立て、席を立つと、リグレットは他のテーブルの上で料理を食べていたミュウに声を掛けた。

「みゅみゅ〜う、分かりま〜」

「そうは行かねえなあっ！」

ミュウがリグレットの傍へ駆け寄ろうとしたその時、店のマスターがミュウの身体を引っ掴み、そして彼の頭に包丁を突きつけてきた。

第10話 桃色の髪と黒い導師服（後書き）

見てくれてありがとうございます！

実は投稿するうえで一番悩ましいのはサブタイトルなんですよね。

今回みたいに本文ネタバレを含んだタイトルは自重した方がいいのかなあ？ ふむむ……

第11話 アツはナツいのです(前書き)

試しに書き方を少し変えてみました。

行間を開けた今回の書き方と前回までの書き方、どちらが良かったか、感想で送ってもらえると幸いです。

## 第11話 アツはナツいのです

「みゅっ!? みゅみゅみゅ〜っ!?」

突然の出来事にミュウの気は完全に動転していた。無意味に足をジタバタさせるが無駄な抵抗だった。

そんなミュウとは対称的にリグレットは冷静に言葉を連ねる。

「ソイツは私の連れだ。離してやってくれないか?」

軽く相手を睨み、威嚇するように怒気を放ちながら言葉をぶつけるリグレット。

しかし、店主は鼻で笑い、小馬鹿にしたような態度で反抗してきた。

「はっ! そんな簡単に離すつもりがあったら最初から捕まえちゃいねえよ」

もっともな意見で反論する店主。

話し合いは無駄だと悟ったリグレットは腰から譜業銃を取り出す。うとずる。

「おっとっ! 銃を構えた瞬間、こいつの頭は血祭りになるぜ。まあ、どっちにしろそうするつもりだがな」

店主の包丁を持つ手に力が入る。恐らく彼の決意は本物だろう。

「……………」

リグレットは考え込むように表情を固める。ミュウのピンチだといふのに全く動揺を見せていない様子だった。

するとリグレットは突然ミュウ達に背を向け、酒場の入り口前まで歩き出した。

「おいっ！ こいつがどうなつてもいいってーのか!？」

この反応には、逆に店主の方が動揺を示していた。彼にしてみればリグレットの動揺する姿を見たいが為に取った行動だけに、いつまでも冷静で居られると虚しさだけが胸に募る。

「ミュウ、そのまま上を向け」

「みゅ？」

突然のリグレットが出した命令に、素直に従い、上を向くミュウ。

「そのまま火を拭け」

「みゅみゅ〜う、わかりましたですの〜」

ミュウは笑顔で了承をすると、瞬時にソーサラーリングの第五音素の譜が全体を赤く変色させた。

だが、店主はそんなリングの変化になど気付かず、余裕に笑いこぼっていた。



酒場での一軒の後、表通りに帰ってきた二人は宿の一室で一息ついていた。

ミュウは酒場での出来事を回想しながら愚痴るように言葉を漏らしていた。

しかし、リグレットは別のことを考えていた為、ミュウの愚痴など耳に入ってきていなかった。

「（リングを探していると言うことは、アイツもヴァーゲスト側に着いているということか？　しかし、なぜ……？）」

「みゆ？　リグレットさん、何を怖い顔しているのです？」

リグレットの様子がおかしいことに気付いたミュウは、心配そうに彼女の顔を覗き見る。

だが、考え事に没頭しているリグレットには目の前の迫るミュウの顔にも気付いていなかった。

「（アイツがこの街に居たのは昨日と聞いた。つまりもうこの街に滞在している可能性は低い）」

「みゆ……？　リグレットさん？」

ミュウはリグレットの肩に乗り移り、小さな手で彼女の頬をペシペシと叩く。その光景は、ペットが主人にかまって欲しい時に見せる仕種によく似ていた。

しかしリグレットはそれでも気付かない。

「(このような平野に隔離された街だと、次にアイツがどこに行ったのかは推測しがたいな)」

「みゆみゆう。リグレットさんが突っ込まないなんて明らかにオカシイですの〜」

ミュウは彼女の額に手を当てる。熱を測っているつもりなのだろう。

しかし、体温に異常は感じられない。

リグレットが終止無言なので、なぜかミュウにどうしても彼女にツッコんでもらいたいという衝動が押し寄せた。

「え〜……ごほん……いや〜、リグレットさん、アツはナツいですの〜」

「……………」

ミュウの決死の覚悟で繰り出した定番ポケにも反応を示さないリグレット。

それでもミュウはめげなかった。

「(みゆう……無反応は辛いですが……でも負けないですよ)。いや〜、リグレットさん！ サムはフユいですよ〜」

今度はあまり聞かないポケを繰り出すミュウ。定番ポケの冬バー

ジョンだが、説明がないとたぶんわからない。

「……………」

「みゆうううう……………」

ミュウが生まれて初めてツツコミ無しの寂しさを実感した瞬間だった。

リグレットはこれから取るべき最良の行動を思考していた。

そして長考の末、導き出した答えは

「ミュウ、予定を変え、これからモーヴへ直行することに」

リグレットはなぜか言葉を途中で止めた……………というより止まった。妙な珍物が視界に入ってきたからである。

「ミュウ……………何をやっているのだ？」

見ると、鼻に割り箸を突き刺し、お腹にマジックで腹顔が描かれており、どこからか仕入れてきた大きなボールの上で、器用に皿回しをしているミュウの姿が在った。

「ふが!? ふがががふががふが…」

鼻に割り箸を突き刺している為、ミュウが何を言っているのかわからない。

リグレットは無言でミュウの鼻に刺さっている割り箸を抜いた。

「やっと、リグレットさんがツッコんでくれたですの〜」

定番ポケでツッコんでももらえなかったミュウは、一発芸で攻めることにしていた。

腹芸に始まり、皿回し、球乗り、とエスカレートして行き、最終的に現在に至った。

「……………」

ズボッ！

「ふがっ!」

無言のまま、再びミュウの鼻に割り箸突っ込むリグレット。

「予定を変更し、今からモーヴへ向かうことにする。お前も準備だけは済ませておけ」

そう言つと、彼女は部屋を出て行った。道具屋に常備品でも買いに行くのだろう。

「……………」

一人部屋に残されたミュウは、ゆっくりと玉を降り、静かに鼻から割り箸を抜いた。

天然以外のポケは、どうもイマイチなミュウだった。

第11話 アツはナツいのです(後書き)

「スキット」 【姐さんよ、永遠に】

店主「店が……俺の店が……丸焦げに……」

ゴロツキ達『……………』

店主「くそっ！ このままじゃ済まさねえぞ！ ……そうだ、あることないこと噂を広めてこの街から出入り禁止令を食らわしてやる」

ゴロツキ達『……っ！?』

店主「よし、さっそく……って、アレ？ どうしたんだ？ お前ら……俺の周りに集まってきて……あれ？ なんか殺気を放ってないか!?!」

ゴロツキA「俺達の姐さんに……」

ゴロツキB「出入り禁止令など……」

ゴロツキC「ふざけたこと抜かすんじゃないやねえ！ クソオヤジが!?!」

店主「うぎゃあああああああああああああああああつ!」

……………

……

……

ゴロツキD「……姐さん、悪は絶ちました……」

ゴロツキE「俺達はいつでも姐さんの帰りを待っています……」

ゴロツキF「姐さんとの再会を信じて……一同、敬礼!!」

ゴロツキ一同『(ビシッ!)』

店主「……な、なんなんだ……こいつら……」

第12話 湖の戦い（前書き）

「スキット」 【旅準備】

リグレット「医療関係に……ボトル関係……」

ミュウ「お菓子関係に……木の実関係……」

リグレット「あと食材と……日用品も……」

ミュウ「あとお菓子関係と……お菓子関係も……」

リグレット「よし、準備するものはこんな所か……」

ミュウ「こっちも準備完了ですの〜」

リグレット「……エクレールラルム！」

ミュウ「みゅうううっ!? ミュウの荷物が！ 必需品が墨につ  
!?」

リグレット「よし、準備も整った所でさっさと街を出るわよ」

ミュウ「……（シクシク）」

## 第12話 湖の戦い

「はあ……はあ……はあ……や、やっと……森から出られた……」

「未だに樹海をさまよい続けていたアザゼルに、ようやく祝福のコールが訪れる。」

疲労が汗となり、頭天边から足の根元まで汗球が浸っている。黒いフェイスマスクも汗で満遍なく濡れていた。

「ちっ、結局フレスベルグと合流できなかったじゃねえか。ったく、あの鳥め……（ぶつぶつ）」

まるで合流出来なかったのは自分のせいではなく、フレスベルグの方に非があるみたいない方をするアザゼル。

「まあ、あんな鳥頭なんぞ放っておくとして……これからどうするか……」

森から脱出できたとはいえ、その先に待つのは何も無い平野のみ……フレスベルグ不在で上空移動ができない今、状況は森の中にいるときと何ら変わりなかった。

「しゃーねえ……歩くしか方法は」

「アザゼル……」

愚痴りながら歩みを進めたその時、不意に背後から何者かに声を

掛けられた。

「うおおおうっ！」

こんな辺境に人がいるとは思わなかったアザゼルは、思いっきり身体を仰け反らせながら驚いた。

振り返ったその先には、長いピンク髪の導師服を着た、まだ幼さが残る少女がそこに立っていた。

その背後にはライガとフレスベルグが待機している。ちなみにアザゼルが連れていたフレスベルグとは別種である。

「……何だ、新入りのガキか。何でこんな所にいるんだ？」

「リングを探していたら……アザゼルの姿が……見えたから……」

なぜか躊躇いがちに言葉を連ねる少女。

別に緊張しているわけではなく、単にこつという性格なのだろう。

「そうか。でもリングはもうこの森にはねえぞ。たぶんとっくに脱出済みだろうしな」

つまらなそうに顔を顰め、舌打ちを入れるアザゼル。

自分の間抜けが原因とはいえ、ミュウとリグレットに逃げられたことで彼の機嫌はよろしくなかった。

「……なんだ。じゃここにはもう用は……ないから」

そういつと、背後に控えていたフレスベルグに再び跨る少女。

だが、ここでアザゼルがストップを掛けた。

「待て、お前もフレスベルグを連れていたのか。じゃ俺も乗せて行け」

「やだ。じゃあね」

アザゼルの誠意の感じられない頼み方に即答で断る少女。そしてすぐに空の彼方へと飛び去って行った。

一人残った彼に残るのは、新入りにすら見捨てられたという事実の虚しさ。

「……さて、本当にこれからどうしよう」

新入りの少女にあっさり振られたアザゼルは、虚しさのあまりしばし空を見上げながらしばらく呆然と立ち尽くすのだった。

バザバサバサバサバサ……

空を見上げていると、湖に待機していたはずのフレスベルグが大空を駆け巡っていた。

何時間も放置されていたフレスベルグは、主人の顔など真っ白に忘れ、彼は完全に野生へと戻っていたのであった。

永遠と広がる緑と土色の平野。そんな道無き道をひたすら歩み続けた先に見えた蒼の水流。

その場所は旅人からは『平野のオアシス』と呼ばれ、今も多くの旅人が水流の音に耳を傾けながら旅の疲れを癒している。

ミュウとリグレットもその一角で休憩を取っていた。

「綺麗な湖ですの〜」

目の前に広がる絶景に、目を輝かせながら感動するミュウ。

つい最近別の湖で溺れかけたことなど、彼の脳裏にはすでにデリート済みのことらしい。

「このオアシスは音素の気象密度が薄いのだ。だからこの場所に魔物が侵入することはほぼ皆無であり、湖が汚されないためこの透明度を保っている……というわけよ」

湖の諸事情を丁寧に語るリグレット。

「……………」

リグレットの丁寧な質問に、永きに渡る沈黙で返すミュウ。

「……すまない」

相手がミュウだったことを悟った瞬間、自分の誤りを認め素直に謝るリグレット。

しかし、謝られると逆に虚しさが募るだけであった。

「みゅううううう……」

落ち込みっぷりを全面に醸し出し、無口になるミュウ。

そんな彼の心情を察してか、リグレットが別の話題を振り、場の空気を取り払う。

「そつえばミュウ。お前、火を噴くこと以外にどんな能力があるのだ？ リングには三つの譜が刻まれているようだが……」

彼女はミュウと出会ってからミュウファイア以外のアクションを見たことがない。

この質問は疑問というより興味に近かった。

「みゅみゅうう　　後の二つはミュウアタックと　　」

気落ちを瞬時に取り払い、ミュウが満面の笑みで説明を始めようとした矢先、リグレットは周囲のある異変に気付いた。

「　　ちょっと待て……湖の様子がおかしい」

普段は穏やかな水流の湖が、今は何故か大きく波打っていた。

水源は海や川に繋がっていないので魚など海洋生物はいないはず……いや、居たとしてもこの波打ちの大きさは異常だった。

リグレットは湖の底を凝視する。

透明な湖の底を満遍なく、異常な視力を誇るブルーの瞳が異変を隈なく探す。

そして 見つけた。湖の中に徘徊する小さな影……

影は徐々に近づきながら浮上してくる。そして

湖からザバアっ大きな水しぶきが立ち、その音源の中心から大鱗に覆われたアイスリザードが水面に姿を現した。

『魔物が出るはずのない』と説明された矢先に出没したこのトカゲみたいなの外見の魔物、アイスリザードだ。

アイスリザード オールドドラントでは主に北方に生息する獣型の魔物であり、パワー、防御、回避、全てに至って普通。プレスも使ってくるが、それも注意さえしていればさほど怖くはない。特に突起して優れている能力があるわけでもない。

つまり、酷い言い方をすれば

「……………雑魚ね」

リグレットが本人（？）を目の前にしながら思わず本音を漏らす。

アイスリザードより何倍も戦闘能力に優れたレプリカナイトの大群を退けたミュウ達に取って、今更こんな普通の魔物……それもたった一匹に遅れをとるはずがない。

その証拠に戦闘慣れしていないミュウですら平然としていた。

「グルルツ！？」

リグレットの『雑魚』発言に怒ったのか、アイスリザードの威嚇を含んだ視線が彼女達に注がれた。

どうやら人間の言葉を理解出来る利口なトカゲ　じゃなくて魔物らしい。

「確かアイツは炎が弱点のはずよ、ミュウ、やっちゃいなさい」

雑魚相手に自分が動くのは気が進まないのか、リグレットはミュウに命令を下した。気分は正にポ　モントレーナー。

「了解ですの〜」

リグレットとは対象的にノリノリなテンションのミュウ。

リグレットに頼りにされたこと、自分が戦闘の足手まといになっ



レプリカルーンですら瞬時に炭と化した必殺ファイア、炎が弱点なアイスリザードなら当然同じような結末を辿る……二人がそう確信し、気を緩めたその時

ピカッ!!

アイスリザードの眼前で『何か』が光を放った。

そして……

「なっ!？」

「みゅみゅっ!？」

炎がアイスリザードの眼前で突然方向を変えた。

そして向きを変えた強大な炎は再び真っ直ぐ走り始める。

ミュウファイアはアイスリザードの眼前で『何か』に反射され、方向を変えたのだ。

向きを変えた炎が走るその先には、予想外の事態に驚愕し、硬直したままのミュウとリグレットの姿がそこにあった。

## 第12話 湖の戦い（後書き）

見てくれてありがとうございます！

書き方は前回と同じ行間を開ける方式でした。

ただ設定で行間を自由に弄れるみたいなんですよね。やり方わからないですがw

### 第13話 魔弾無効（前書き）

今回はちょっと短い……かな？

キリを良くするために本文2000文字程度です。

### 第13話 魔弾無効

「くっ！ あ、危なかった……」

跳ね返ってきた大火炎を前に呆気に取られていたリグレットだったが、自我を取り戻した刹那、瞬時に身体が回避行動を起こしていた為、ギリギリの所で火炎の範囲外へ脱出することに成功していた。

「はっ！ そうだ……ミユウ！ どこだ！？」

自分の他に、もう一匹あの大火炎に巻き込まれた者がいることを思い出したりグレットは、顔面蒼白になりながら必死にその姿を探した。

しかし、その姿はそこにはなかった。

最悪の展開が彼女の脳裏に過ぎろうとしていた。

しかし

「みゅうう……こゝこゝで〜す〜の〜」

姿が見えないのに声だけはした。

声の発端となる場所を探してみると、その声は空からしていることに気が付いた。

そして、空を見上げたリグレットは一瞬の自分の眼を疑った。

「お前……空を飛べたのか!？」

彼女の視線の先、そこには大きな耳を翼代わりにして大空に羽ばたいているミュウの姿が在った。

「みゅみゅーう　ミュウアクションの一つ、『ミュウウイング』  
ですの〜」

大火炎が反射されて自らが巻き込まれそうになった時、彼は何時かと同じように慌ててミュウウイングを広げ、大空へ脱出していた。

「（なるほど、ソーサラーリングの力の一つか。それにしてもあの状況で瞬時にあそこまで移動するとは……常人では考えられない回避スピードだな）」

ミュウの判断スピードと回避能力に素直に感心するリグレット。

ちなみに常人では考えられない回避スピードなのはあなたも一緒ですよ、リグレットさん。

「リグレットさん！　危ないですよっ!」

上空浮遊していたミュウが、突如大声でリグレットに注意を促した。

見ると、アイスリザードが吐いた氷のブレスが、リグレット目掛けて真っ直ぐ飛び放たれていた。

だが、彼女はそちらに目もくれないまま、サイドステップで軽く回避する。

そして振り向き様に、彼女は次の行動を起こしていた。

バンバンっ！

リグレットは敵の対面に視線を移すと、瞬時に二丁の譜業銃を取り出し銃弾を放った。

跳ね返されることを警戒してか、アイスリザード正面から少し角度を付けた位置から銃を放つ。

パリンパリンっ

「……………っ!？」

跳ね返されると思われていた銃弾は、アイスリザードの眼前でガラス版が割れたような音を立て、そのまま失速して湖の水面にプカクと浮かんでいた。

「……………?？」

完全に攻撃を無力化されるというこの訳の分からない状況に、ミユウとリグレットはただ困惑するのであった。

バンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバン  
っ！

リグレットの早撃ちで、数十発の弾道がアイスリザード目掛けて  
飛び放たれる。

これだけ撃つても球切れしないのが不思議で仕方がない。

パリンパリンパリンパリンパリンパリンパリンパリンパリンパ  
んっ！

彼女が放った弾数だけ、ガラスの割れるような音が鳴り響き、結  
果として湖に弾丸が浮かび上がる。

しばらくそのやり取りを続けていたリグレットは一区切り付ける  
と、大きいため息を吐き、両手に構えた譜業銃を腰にしまった。

そして上空浮遊していたミュウに呼びかけた。

「……ミュウ、降りて来い」

「みゅ？ わかりましたですの」

突然指名が掛かり、急ピッチで彼女の元へ降り立つミュウ。

そしてちゃっかりリグレットの頭の上へと綺麗に着地した。

「とりあえず、奴への攻撃無効化と火炎反射について少し分かったことがある」

「みゅっ！？　すごいのです、さすがリグレットさんですの」

などと言葉を交し合っている間にも、アイスリザードは湖の水面から氷ブレスを吐き続けている。

リグレットは余裕でサイドステップやバックステップなどを多用し、ひたすら避け続けながら話を先に進める。

「水面に弾丸と共に浮かんでいるガラスの破片……恐らくアレが火炎を跳ね返し、銃弾の威力を相殺したタネだろう」

湖に視線を移すと、確かに水面には銃弾の他にキラキラ光る破片のようなモノが浮かんでいる。

おかげで透明感漂う綺麗な湖に、大量の不純物が浮かび上がるといふ結果を招いていたりするが、今更そんな細かいことを気にするような二人ではなかった。

「譜術を用いた攻撃では反射されるのがオチだが、銃撃のような物理攻撃であれば、あのガラスのような盾を壊すことが出来るらしい……だが壊しても壊しても奴は無限にガラスの盾を量産する」

リグレットの早撃ちにも遅れを取らない量産スピード。

これではいくら発砲してもただの弾の無駄遣いで終わってしまう。

リグレットが譜業銃を納めた理由もその辺にあった。

「オマケに奴は湖から出てこない。近づくことが出来なければ奴を倒すことは不可能だろう」

「みゅみゅっ!?!? じゃあ、どうするのです!?!?」

珍しく神妙な表情で聞き返すミュウに、リグレットは予想をもしていなかった答えを返してきた。

「逃げる」

「……………ハイ?」

あまりにも予想外の答えに、ミュウは声を裏返ししながら素っ頓狂な声を出すのであった。

### 第13話 魔弾無効（後書き）

見てくれてありがとうございます！

どうも切り処がわからずに本文が長い時もあれば短い時もあります。

次回もちよつと短い……かな？

## 第14話 蒼い結晶体（前書き）

またTOAやりたくなってきたなあ。3DSのアビスもやってみた  
いです。

ハード持っていないけどww

## 第14話 蒼い結晶体

「そもそも私達には奴と戦う理由はない。戦っても無駄に体力を消耗するだけだ」

言われてみればその通りだったりする。

襲われたから対処した……だが対処しきれなかったから放置する……無責任な感じもするがそれは普通の反応だ。無理して倒す理由も彼女達にはない。

なぜ音素気象密度が低いこの場所に魔物が出現したのか、そしてあのガラスのような盾はなんだったのか、気になる所は盛りだくさんだが、今はそんなことを調べることもよりも優先すべきことはある。

「奴が湖から出てこないということは、戦闘では向こうが有利であるが、逆に言えば100%逃走に成功するということだ……いい加減、奴のプレスを避け続けるのも疲れてきたからな」

ため息を吐きながらも、進行形でアイスリザードのプレス乱れ撃ちを避け続けているリグレット。

奴が凄いのには防御能力だけなので、唯一の遠距離攻撃方法であるプレス攻撃などリグレットの運動神経ならば目をつぶっても避け続けられるだろう。

「みゆうう。でも魔物をあんな所に放置して大丈夫ですか？ もしミュウ達が逃げた後に暴れ出したりなんかしたら……」

「そんなこと我々には関係ない。それにここに居る者達は皆冒険者だ。今更魔物に絡まれたくらいで慌てる者もいまい。というわけで行くぞ！」

「みゆうう……」

ミュウは多少納得のいつていない表情を浮かべているが、今回はリグレットの方が正論であるため何も言い返せなかった。

リグレットはサイドステップでブレスを避けながら、ゆっくりと奴との距離を取って行く。

焦らなくても逃走は成功すると確信しているため、リグレットは回避に集中しながら離れてゆくのが得策と考えたのだろう。

「ガルツ!? ガルルルルルツ!?」

ついにブレスの届かない所まで遠ざかると、アイスリザードはここで初めて2人が徐々に自分から距離を置いていることに気付き、咆哮を上げた。

「ミュウ、奴は何て言っているのだ？」

もうブレスが飛んでくる心配がないと悟ると、リグレットは湖に背を向け、頭に居座っていたミュウに質問を掛ける。

「がるるる〜、って言っているのですの〜」

「……………そうか」

あえてツツコミは居ねず、リグレットはそれっきり無言のまま歩み続けた。

そして二人はそのゆっくりと湖を後に

ザツバ~~~~~ンツ!!

「……?」

ふと背後から大きな水しぶきの大音が轟いた。

大音に促され振り返る二人……そして

「ガLLLLLLLL~~~~っ!!」

その視線の先には、咆哮を上げながら、駆け足でこちらに突進してくるアイスリザードの姿があった。

その腹部には、青く光る球体が淡い輝きを放ちながら、奴の身体に吸い付くように垂れ下っているのが見えた。

「ちっ、追いかけてきたのか。てっきり湖から出られない性質でもあると思ったのだが……」



音素気象密度の低いこの場所に出現したのも頷ける。あの鏡の盾もその力を借りて生み出したと考えれば納得のいかないこともない」

リグレットは球体を一目見ただけで、それが音素結晶体であること、音素の種類、そして濃度まで見抜いていた。

しかし、そんな目視鑑定をゆっくり行っている間にも、自分達とアイスリザードの距離はグングン縮まってきている。あまり悠長にしている時間もなかった。

「タネが分かった所でやはり私達に戦う理由などない。ミュウ、このまま逃走するぞ！」

「ちょっと待つですの〜！ 理由ならあるのです！ 戦うですの〜！」

リグレットが走り去ろうとした時、彼女の意見に反する主張で彼女の足を止めさせるミュウ。

彼がここまで主張を強いることはかなり珍しい。

「なんだ？ その理由とは？」

納得のいかない様子のリグレット。彼女にしてみたらミュウがここまで主張する理由が分からない。

「あの青くて丸いのはリングに新しい力をくれるですの〜。今まで何度も丸いのを発見したんですけど、その度にリングに新たな力をくれたですの〜」

そう　　今までの冒険の中で何度も見かけた結晶体、その度にリングに新たな譜を刻み、能力を与えてきていた。それがソーサリーリングの特徴であり、美点である。

ミュウファイアを生み出した第五音素の結晶体。

ミュウアタックを生み出した第二音素の結晶体。

ミュウウイングを生み出した第三音素の結晶体。

そして目の前に見える第四音素の結晶体も必ずやリングに新たな能力を与えてくれることだろう。

幸いにもこの世界に来た時、リングのパワーアップ化と共に、新たに三つの譜を刻める空洞が出来ていた。

つまり、あと三つほど結晶体を追加することができるという可能性が高い。

「……分かった」

リグレットがため息と共に肯定の言葉を漏らす。その言葉にミュウの表情にも笑顔が浮かんだ。

しかし、彼女の次の言葉がミュウの表情を一時凍らせることになる。

「だが、私は戦わない。新たな力を手にしたいのであれば、お前一人で戦い勝ち取ることだな」

## 第14話 蒼い結晶体（後書き）

見てくれてありがとうございます！

偉く中途半端な時間に更新してしまいましたが、年末年始はそんな日が増えそうです。

休みになっても特にやることないしw

## 第15話 弱点発覚(前書き)

アイスリザード戦で全体の約1/5が終了です。  
このペースなら70話ちょっとで終われるかな？  
あくまでも目安ですが……

## 第15話 弱点発覚

「みゅうっっ!?! ミュウ一人で戦えていいのですの!?! 酷いですの、いじめですの、動物保護法違反ですの!」

思いもよらぬリグレットの言葉に、ぶつぶつと不平を申したてるミュウ。

「私は元々戦う気はないと言っただろう。無駄な戦いは好まない。待っていてやるから自分で何とかしてきなさい」

「みゅうっっっ」

不平を申した所でリグレットから返ってくる言葉は変わらない。

今ミュウに与えられた選択肢は二つ――

新しい力を求めて戦うか……

新しい力を諦めて逃げるか……

「ちなみに、私は戦う気はないと言っただが、逃げる気も失せた……というわけでさっさと逝ってこい」

「みゅみゅみゅっ!?!」

訂正。もはやミュウに与えられた選択肢は一つしかなかった。

「(みゅうっっ)。やるしかないですの」

自分が言い出したこととはいえ、早くも後悔気味な感慨に浸るミュウであった。

ミュウ達がそんなやり取りを交わしている間に、自分とアイスリザードとの距離はぐんぐん縮まってきている。

毛を逆立てながら迫ってくる奴の背景には、鬼気迫るオーラが滲み浮かんでいる。

よほどリグレットの『雑魚』発言に怒ったのだろう。

そして、そのとばっちりを受けるのはミュウであり、事の根源であるはずのリグレットは隅の方で壁に背を預けて傍観するのみであったりする。

アイスリザードは速度を落とさぬまま猛突進し、距離がゼロになると同時にミュウに鋭い爪を差し向けた。

ミュウとアイスリザードのスピードはほぼ互角、しかし回避能力になるとミュウに分がある。

なぜなら

「うい~~~~~んぐ！」

高らかな叫びと共に、ミュウは大きくウイングを広げ、瞬時に遙か上空へと飛び移る。

そう　ウイングを広げたミュウのスピードはあの怪鳥プレスベ  
ルグよりも上、そして空を飛べないアイスリザードは接近戦に持ち  
込むことができなくなるのだ。

しかし、それで戦闘を有利に運べるわけではなかった。

「カアアアアッ！」

アイスリザードの氷のプレスが、ミュウのいる上空を目掛けて真  
っ直ぐに放たれる。

先程リグレットは余裕で避けていたが、ミュウには羽を大きく動  
かして、自らが軌道外へ逃げるのが精一杯だった。

炎を吐けば相手のプレスを相殺できる　そんな考えが一瞬ミュ  
ウの頭に過ぎったが……彼はそれをしない。

あの圧倒的な威力の炎である、プレスを相殺どころか押し勝って  
しまう。そうならあの鏡の盾で跳ね返るのがオチだ。

それに　ミュウはそれが出来ない理由がもう一つある。

それこそがミュウにとって意外な……そして決定的な弱点でもあ  
った。

「逃げ回ってばかりでは勝てないですよ。何とか攻撃を……でも」

でも譜術系の攻撃は奴の眼前で跳ね返されてしまう。よってファイアは使えない。

つまり、ミュウの持っている能力で奴に有効そうな攻撃手段は一つしかない。

ミュウは攻撃を繰り返す為にウイングを納め、いったん地面に足を着ける。

同時にリングを土色に変色させ

「カアアアアアツ!!」

しかしリングに力を注いでいる最中に僅かながら隙が生じた。

それを好機に見たアイスリザードは氷ブレスを発射させる。

「みゅみゅっ!?!」

対応に遅れたミュウは、奴のブレス攻撃に避けきれないと判断し、慌ててリングの色を土色から赤色へと変えた。



早急な判断で大空へ退避していなければ、今ごろミュウの身体は墨になっていたことだろう。

ミュウは空を大きく徘徊すると、再び地面に足を着き、今度は突進しながらソーサリーリングの色を土色に変色させる。

だが

「カアアアアアアアアアアツ!!」

アイスリザードの咆哮と共に再び迫る氷ブレス攻撃。

「みゅみゅっ!?!」

ミュウは仰け反りながら急ブレーキを施し、再びウイングを広げ大空へ逃げる。

「(……なるほどな)」

その戦いを傍観していたリグレットはここまでの戦闘経過を見て、彼女なりにミュウの弱点を見出していた。

## 第15話 弱点発覚（後書き）

見てくれてありがとうございます！

前書きで70話ちょっとで終わるかもって言いましたが、100話超えもあり得る気がしてきました（汗

どっちにしろ長くなることは決定ですので、どうか離れずに着いてきてくれるとうれしいです。

第16話 逃げない勇氣 VS アイ斯里ザード(前書き)

今回はちょっと長めかな。

区切り方が下手で長くなったり短くなったりして申し訳ないです。

## 第16話 逃げない勇氣 VS アイスリザード

「（ソーサラーリングは一度に二つの能力を同時に発動させることは出来ないみたいだな。それにあの臆病な性格が災いして戦いの視野を狭めてしまっている）」

前者は仕方ないこととはいえ、後者の弱点は深刻だった。

戦いの視野を狭めるということは、無限に在るはずの戦術を有数に限らせてしまうことを意味していた。

ミュウファイアは単なる遠距離攻撃として……

ミュウアタックは単なる近距離攻撃として……

そしてミュウウイングに関しては単なる攻撃回避だけにしか用いていない。

相手が低能魔物ならともかく、ある程度知能を持った敵が相手となるとワンパターンの戦法は命取りになる。

まあ、それでも超一流以上の力を持っていないと今のミュウの相手が勤まらないだろうが……。

それに増してあの臆病な性格もいけなかった。

敵のプレスなど大した威力もスピードも無いのだから、先ほどのリグレットみたいに左右前後のステップを用いて交わせれば良いものの、ミュウは敵の攻撃に過敏に反応してしまい、つい安全圏の上空

へと逃げてしまおう。

このままでは永遠に勝負が付かないと感じたリグレットは、ここで一つ上空に居るミュウにアドバイスを送る。

「ミュウ！ ウィングを逃げにばかり使うな！ リングの力を信じ、そしてもっと頭を使ってみる」

「みゅっ！？ 頭を使う………ですか？ ……むむう）………」

「（しまった。言葉を間違えたか………？）」

『頭を使い』 それはミュウには一番求めては行けないこと。

後悔するリグレットを余所に、すでに投げられた言葉はしっかりとミュウの脳に届いてしまっていた。

「ウィング………逃げない………リングを信じる………頭を使う………みゅみゅっ………」

ミュウなりに必死に思考を重ねた結果、一応彼なりな答えを導き出せたみたいである。

そしてその答えを元に、彼は一つの策を練り上げる。

ミュウが考え出した作戦 それを実行しようとする目を輝かせている彼を見て、不安になるのはどうということだろうか？

そんなリグレットの不安と心配を余所に、上空に居るミュウは作戦を実行する為、アイスリザードの真上の位置へと移動するのであ

った。

上空で目標を定めたミュウは、意志を固めるため黙想をする。

「（逃げない……逃げない……逃げない……）」

リグレットの助言その一、『ウイングを逃げに使わない』。

今までに逃げにしか使っていなかったミュウウイング

そう、『逃げ』に関しては使いこなせたのだ。

つまりそれは能力を使いこなせるという裏付けとも取れる。

むしろ余計な杞憂を取り除き、自信に繋がっていてもおかしくない。

「カアアアアアアアツ！！」

だが黙想中はあまりにも隙だらけだった。それを好機と言わんばかりにアイスリザードが氷ブレスを発射させる。

目標に向かって真っ直ぐ進む氷ブレス、威力はないが命中に関しては正確だった。

だが、ここで黙想を終えたミュウの目が　開いた。

その眼光は鋭く　以前の臆病さが感じられない、『戦つ者』の眼をしていた。

「みゆうううううううううううううつ！！！！！」

気合一閃、ミュウの咆哮が大空に木霊する。

そして、ミュウは目標　アイスリザードだけを見据えて真っ直ぐ急降下した。

しかし、前方には先程放たれた氷ブレスがミュウの眼前に立ちはだかる。

「（リングの力を信じる………リングの力を信じる………リングの力を信じる）」

リグレットの助言その二、『リングの力を信じる』。

リングの力を疑っていたわけではなかった。ただミュウには実感がなかっただけなのだ。

圧倒的な力を手に入れたという実感が……

だからミュウは信じてみることにした　いや、信じて大丈夫だと確信していた。

なぜなら、自分はソーサラーリングの主なのだから……



「（頭を使う……頭を使う……頭を使う……）」

リグレットの助言その三、「頭を使え」。

これは言わずともなく、『もっと考えて戦いに臨め』という意味だが、プチトマト脳のミュウ（酷）はとんでもない思い違いをします。

「みゆううううっ！！！」

氷ブレスを跳ね除けたミュウは決意の咆哮を上げながら、フルスピードで真っ直ぐ目標に向かって突進する。

ミュウはスピードを緩めるつもりなかった。このまま突進する決意を秘めているのは彼の鋭い目を見れば一目瞭然だ。

アイスリガードもそれを察してか、鏡の盾を生み出し重ねる。それも何重に……短い時間の中で量産できるだけの数を……

そして

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ~~~~~

ンっ……！！

ミュウとアイスリガードの位置がゼロになると、耳鳴りがするく

らの轟音が辺りに鳴り響いた。

スピードを味方につけ、凄まじい威力を生み出した風の盾。物理攻撃に対しても素晴らしい強度を持つ鏡の盾。

この二つの盾同士が衝突し、二匹の姿を隠すほどの砂煙が昇る。

だが立ち上る砂煙の先には、無常にも無傷のままに地上に立つアイスリザードの姿があった。

たった一枚でも、リグレットの銃弾一発の威力を相殺するくらいの強度を誇る鏡の盾、それを何重に重ねられたのだ。いくら渾身の突撃と言えど、それをやぶることなど不可能

そう思われていた矢先だった……

ピシっ…………ピシピシ…………ピシピシピシピシっ…………

「…………っ……！」

鏡の盾の外郭から徐々にヒビが内側の鏡へと侵食してゆく。

そして

ガシャ……………………………………ん……！！

完全傷物と貸したガラスの盾は、ただのガラス片となって地に散らばった。

アイスリザードは地に散らばるガラスの破片を見て、驚愕と恐怖で身体を硬直させる。

しかし、その瞬間にもミュウは次の行動を起こしていた。

「アタ~~~~~クっ!!」

「……っ!？」

アイスリザードが慌てて振り返ると、そこにはリングを同色に身体全体を土色に染めているミュウの姿が在った。

慌てて鏡の盾を再度量産しようとするが 遅かった。

ドガッシャ~~~~~んっ

!!!!

先程よりも大音量の轟音が辺りに響いた。

見事にクレーターと化した地面、立ち上る砂煙、そしてその奥に立っているのは ミュウ。

ミュウはリグレットの助言通り、『頭を使った』突進で敵の盾を打ち砕き、『頭を使った』アタックで見事アイスリザードの息の根を止めた。

そう　ミュウに取って『頭を使う』∥『頭突き』と方程式が組み上がってしまったみたいなのだ。

「（意味が違うのだが……）」

戦いを終止見届けていたリグレットは苦笑を漏らしながらも、ミュウの戦いっぷりに感嘆していた。

ミュウに取って初めての戦いは、ハイレベルの名勝負を経て、まさに意味のある勝利で締めくくることが出来たのだった。

「や、やったです……の……」

ミュウは勝利を確認すると、そのまま目を回しながらフラフラと背中から倒れる。

存分に『頭を使って』しまった為、脳が振動されてしまい、視界がグルグルして定まらないのだ。

だが地面に倒れこむ前に、いつの間にか傍へと歩み寄っていたリグレットがミュウの身体を支えた。

「荒業ばかり使うからこうなるんだ。もっと頭を使えと言ったのに……」

「……みゆうう？ もっとミュウアタックを多用すれば良かったですの〜？」

「……いや、そういうことではなく……まあ、いいわ……」

深いため息と共に、彼女はアイスリザードの残骸の方へと視線を移す。

そこにはペチャンコになった奴の側に、アレだけの衝撃を受けても無傷のままの第四音素結晶体があった。

青々と輝きを放つ音素結晶体、リグレットはそれを素手で拾い上げると、ミュウの両手にそれを持たせてあげた。

「勝利の結晶だ。今のお前ならこれを受け取る資格がある」

「……みゆう……ありがとう……ですの……リグレットさん……」

力のない返事、だがミュウの表情には満面の笑みが浮かんでいた。今、彼の胸の中は達成感でいっぱいになっていることだろう。

ミュウが青色の第四音素結晶体を受け取ると、ソーサラーリングが新たな力を求めるかのように結晶体はミュウの手から離れ、静かにリングの中へと吸引されて行った。

そして、ソーサラーリングに新たな譜が刻まれる。

ミュウは自身の力で、新たな能力を勝ち取ったのだ。

「……みゆうう、やった……ですの……さっそくどんな能力か……」

新能力がどんなものなのか、さっそく使って試そうとするミュウだったが、やはり視界が定まらず、まともに地面に立つことすら出来なかった。

「軽い脳震盪だ、少し休めば治るわ。それまでリングの力は使わない方がいい」

「みゆうう……」

心から残念そうな表情を浮かべるミュウ。

しかしリグレットの言うとおり、軽い脳震盪を起こしているミュウには安静が必要だった。

「今は身体を治すことだけを考える。モーヴまでは私が運んでやるから、お前はグミでも噛みながら寝てなさい」

そう言いながらミュウを抱っこし、楽な体制を作ってくれるリグレット。いわゆる『お姫様抱っこ』に近い体制だ。傍から見るとかなり妙な光景である。

「みゆうう……ありがとうございますの……やっぱりリグレットさんは優しいですの〜」

「そ……そのネタはもういい！ ほらっ、いくぞ！」

顔を真っ赤に染めながら歩み始めるリグレット。

ミュウは勝利の余韻に浸りながら、リグレットの腕の中にて、安らかな表情を浮かべながら眠りについたのであった。

第16話 逃げない勇氣 VS アイスリザード（後書き）

「スキット」 【どっちが本音？】

ミュウ「そういえば、リグレットさん……」

リグレット「起きたのか……なんだ？」

ミュウ「リグレットさんって、回復譜術を使ったような気がするですの〜」

リグレット「ああ、戦闘ランクをハード以上で私に挑むと、レイズデッドを使える」

ミュウ「（ハード以上!?) ……じゃあ、何でミュウに使ってくれないですの〜?」

リグレット「お前は別に命に関わる怪我をしたわけではないだろう。あの程度ならグミと睡眠で十分だ……それにあの術は疲れるし……」

ミュウ「みゅみゅっ!? 何だか後半の方に感情が入っている気がしたですの〜……」

リグレット「………無駄話はその辺にして、さっさとモーヴへ向かうわよ」

ミュウ「（話が流されたですの……）」

## 第17話 モーヴでの再会（前書き）

ここからが第二章といったところです。

サイトの機能を使えば章分けできるみたいですが、またしてもやり方がよくわからないため普通に投稿しました。

## 第17話 モーヴでの再会

グラン・ソウル最西端に立国された、反立憲立志建国本部『モーヴ』。

オールドドラントの神殿都市ダートを彷彿させるようなドーム型の建物が特徴的で、何よりもこの国独自の特徴的な点が二つある。

一つは、ヴァーゲストの石造が立っていないこと。それはこの世界では違法行為であることを示している。

しかし、この国はあえてその違法行為の措置を施していた。だからこの国は『反』立憲国なのだ。

そしてもう一つ、この国に いや、ここが本当に国であるのかすら疑わしい特徴があった。

それは

「り、リグレットさん……あれは……な、なんですの？」

『それ』を目にした時、あのミュウですら額に薄ら汗を浮かべるほど強烈なインパクトを受けた。

リグレットは鎮痛の表情を浮かべ、あえて『それ』を視界に入れないようにしながら言葉を返した。

「この国の最高権力者 つまり女王の趣味だ。詳しくは私も知らん……知りたくもない」

ミュウが呆気を取られている視線の先、そこには全体がピンク色に配色された巨塔が聳え立っていた。

それだけでも異様な雰囲気かぶんぶん漂うのだが、極め付けに巨大なハート型のオブジェに『よ・う・こ・そ』とメルヘンチックに象られた文字のネオンが光っており、その下には恐らくこの国の女王である人物の等身大オブジェボードがウイנקをしながら、『女王シルヴィアちゃんかキミを待っている』とこれまたネオンの噴出しを使った訳のわからない広告塔が立っていた。

この少女趣味全開の雰囲気にはさすがにミュウも引き気味である。

初めて来た人は絶対にここを国とは思わないだろう。カジノか怪しい店のどちらかと勘違いする人はきつと少なくない。

「さあ、入るぞ」

「ここに入るのです!？」

身体全体に拒否反応が迸るようなピンクの城。そこに入るということはかなりの度胸と勇気が必要だ。

「大丈夫、中は外見に比べるとまともなものだ。外見に比べると……だが……」

激しく不安を与えるようなリグレットの言葉。その言葉の真意は、恐らくミュウの思っていることと一致するだろう。

「目がチカチカしそうですの」

愚痴をこぼしながらもミュウはしぶしぶと城の中へと歩みを進めた。

そして二人が城の中へ第一歩を踏み入れた、その時

「おおつ、リグレットか！ 随分と遅かったではないか」

「あれ？ 後ろにいるのは……ミュウではありませんか！？」

突然、正面から掛けられた二つの声。

しかもその内の一つは、リグレットも想定外な人物のものだった。

「ラルゴか。いろいろあつて遅くなった。それより、そのそちらのお方は――」

「みゅみゅう！？ もしかして……イオンさんですよ！？」

二人を出迎えてくれた声の正体は、リグレットと同じ六神将の一人だった黒獅子ラルゴと、かつてミュウ達と旅業を共にしていた導師イオンの姿がそこに在った。

ローレライ教団の教団兵『オラクル神託の盾騎士団』の幹部『六神将』の一人。通称『黒獅子ラルゴ』。

二メートルを越す巨漢で大型の鎌を振るい、六神将の中でも屈指のパワーの持ち主。

昔は傭兵業を営んでいた彼、本名をバダックと言うのだが、とある理由を元に傭兵を脱退。その後黒獅子ラルゴと名を変え、ローレイ教団兵へ入隊した。

……決してキャラが薄いとかが、人気が微小だとか、技が少なすぎだとか、物語の後半は使者や立会人といったパシリみたいなことばかりしていたとか、バダックと言う名のままだったら絶対一般兵で一生を終えそうな貧相な名前だとか、思っただけでも言っただけじゃない。

モーヴでラルゴと合流することはリグレットから訊いていた。

しかし、もう一人の人物の登場は想定外であった。

「なんでミュウがこの世界に居るのですか？ ……ハッ、まさかルークに散々いじめられたのが原因で、ついに自害を！？」

心中の仰天人物は、その発言も仰天的だった。

「（ついに……って、いつかは自害すると思っていたのか？ この人は……）」

イオンの天然ボケに心中でツッコミが調和するリグレットとラルゴ。

かつて共に旅をした仲間の中に、ローレイ教団の『導師』

つまり最高指揮者であり、教団の最高重要人とも言える人物が居た。

それがこの大ボケをかました少年　　名をイオンと言う。

布石から未来を読み取る　『預言』を読むことが出来ることで、  
オールドラントでは世界の象徴的に奉られていた。

だが、彼もミュウの主人ルークと同じくレプリカと呼ばれる存在  
であった。

イオンレプリカは数人存在していたと言われるが、彼はイオンレ  
プリカの中でも『必要とされるレプリカ』として重宝されていた存  
在なのだ。

普段は大人しくまったりとした性格の持ち主だが、不意にこちら  
が予想もしていなかった大ボケをかますことがある。今みたいに……

童顔で可愛らしい顔立ちから、彼を女性と勘違いする人も少なく  
ないだろう。少なくとも作者はそうだった。

「みゅうっ！　ご主人様はミュウをいじめたりしないですよ！  
せいぜいミュウの耳を掴んで振り回したり、寝ている間に口いっ  
ぱい砂利を詰め込まれたりされる程度で、いじめられたことは一  
度もないですよ〜！」

「（それはいじめられていると言わないのか！？）」

元祖ボケ奇才のミュウ。さすが元祖だけあってイオンのボケに自  
らもボケで返すという高等技術を使ってきた。

リグレットとラルゴは、二人のポケつぶりには終止心中でツッコまずにはいられなかった。

なぜイオンがここにいるのか、そもそもミュウをモーヴに連れてきてどうするつもりだったのか、ラルゴの人気の無さはどうにかならないのか……気になることはたくさんあるのだが、とりあえず女王へ報告するのが先だということで四人は謁見の間へ通された。

広々とした空間、日当たり位置を計算された四角い窓、高級感溢れる王座

まともな所を上げると、そんな所しか思い浮かばないような謁見の会場だった。

部屋全体を埋めるカラフルなオブジェの数々　ピンクの絨毯、金のカーテン、七色に光る電灯……

これだけで常識極まりない目触りな部屋模様だが、それ以上に常識が欠落していると思える箇所はごまんとある。

なぜか王座の隣に山済みされてある女性雑誌の山……

なぜか謁室の隅に置いてある、プリント倶楽部と同等な物と思われる音機関の存在……

なぜか謁室の壁に貼られているイケメンポスターの数々……

一言で言つと、完全私物化されていた謁見の間がミュウ達の前に広がっていた。

リグレットは先ほど、城の中は外見と比べると派手さは薄れていると言った。だがこの有り様は……

「みゆううつ、リグレットさん、うそつきですよ。絶対に外見より中の方が凄いですの〜」

この場にいるだけで眩暈を起こしかねないカラフルな物々、はつきり言つて目障りなことこの上無い惨状だった。ミュウなんか本気で目を回し始めている。

「……いや、私が前に訪ねた時はまだまともなはずだったのだが……おいつ！ シルヴィア！ なんだ、この有り様は！？ というか、謁見の間で寝転がりながら雑誌を読むな！」

「あれ？ リグレット？ 帰ってたんだ。おかえりなさい」

謁見の間の隅に寝転んでいた女性がゆっくりと立ち上がり、リグレット達に笑みを向ける。

清楚な顔立ちの青い長髪の美人　いや、『可愛い』と言ったほうが適切かもしれない。

女王というわりには容姿が若い。幼さすらも少し漂う。もしかしたらリグレットよりも年下なのかもしれない。

髪の色と同色のドレスが良く似合っている。城の外郭に建っていたピンクのオブジェに描かれていたのと同じ人だ。



女王が急に突進してきたと思うと、次の瞬間には彼女の胸の中埋もれているのだ。

驚くよりも先に、戸惑いが先行している現状だ。

唾然とする三人を余所に、女王シルヴィアは所構わず本能のままに自分の頬をミュウの頬に摺り寄せる。

「可愛い可愛いか〜わ〜い〜い〜い〜っ！ ねねねっ、この子どうしたの？ お土産？ あたしへのお土産だよね？ お土産だったらありがたく受け取るよ」

「……はぁ」「」

リグレット、ラルゴ、イオンの三人は、実に予想通りだったシルヴィアの暴走っぷりに、ただ頭を抑えながら、ため息を吐いて呆れ果てるのであった。

## 第17話 モーヴでの再会（後書き）

見てくれてありがとうございます！

『シルヴィア』もこの小説のみのオリジナルキャラクターでございます。

しかし、この名前を見て、「んん？」と思った方はかなりの玄人ト  
OAプレイヤー。

## 第18話 導師守護役（前書き）

そろそろ前書き、後書きで書くことが無くなってきたかも（汗  
小説本文だけを投稿する回もあるかもしれない。

## 第18話 導師守護役

「まず……そうだな……私が樹海の中でミュウと出会った時のことから報告するわ」

とりあえず謁見らしさを齎すため、シルヴィアは王座に、リグレット達三人はその対極に立つことにより落ち着くことができた。

シルヴィアが『王座は材質が固いから嫌』という理由で散々駄々をこねたが、彼女に『ある物』を渡したら、一転して素直に聞き入れてくれた。

「うんうん」

「……みゆううううう」

『ある物』 いや『ある者』＝ミュウがシルヴィアの膝元でいじり倒されているが、リグレットは気にせず報告を続けた。

「ヴァーゲストの側近と見受けられた、黒い装備のデーモン族の男を見掛けたので、私は奴の後を追い、動向を探ろうとした」

「うんうんうん」

「みゆうう。シルヴィアさん、そろそろ離して欲しいですよ」

「だ〜め まだまだ離さないんだからあ……あつ、リグレット続けて続けて〜」

明らかに続けにくい雰囲気である。

……というよりシルヴィアは本当にリグレットの報告に耳を傾けているのかすら不安を憶える。

「ごほんっ！ ……すると奴はミュウの腹に付いているリングを狙っていたようなので、私は奴にリングが渡るのを拒める為、ミュウごと連れ去って逃走したのだ」

「なるほどお〜」

「シ、シルヴィアさん……あんまり首筋は障らないでほしいですの」

「あははっ、ミュウちゃんってば首弱いんだあ　　うりうり〜……あっ、気にせず続けて続けて〜」

……どう対応すれば気にせずに居られるのか、ぜひとも彼女に問いたいところである。

しかし、終止いじり倒されているミュウの待遇に比べると、そんな疑問などとても些細な事だと思えてしまった。

「ミュウと共に樹海を抜け出した後、我々はフリーダムという都市に立ち寄り、酒場に居た情報屋からヴァーゲストの動向について探った。そこで一つ気になる情報が手に入った」

「気になる……といえば、ミュウちゃん。首輪とかしてないよね〜、もしかして野良かな？」

「みゅうっっ！ ミュウをペット扱いしないでくださいですの〜！

それにミュウにはちゃんとご主人様が居るですの〜！」

「なあ〜んだ、ざんねん。ご主人様が居るんじゃ仕方ないけど…  
…もし気が変わったらあたしが飼って上げるからね …… あっ、  
気にしないで続けて続けて〜」

「「これが気にせず居られるかああああああああああっ！  
！」「」

シルヴィアの煮えくり返る態度に、リグレットとラルゴは今まで溜め込んでいた分も一緒に発散するかのようになり、魂のこもったツツコミが謁見の室間に大きく響いたのだった。

「ま、まあまあ……二人とも落ち着いて……シルヴィアも真面目に聞いてあげてください」

結局イオンが抑制の言葉を掛けて、やや興奮気味だったリグレットとラルゴを落ち着かせた。

一時騒然としていた室内も再び静寂を取り戻す。

「むう、イオン君、まるであたしが話を聞いていなかったかのよう  
な言い方をするんだね」

軽くイオンを睨みながら大きく頬を膨らますシルヴィア。

この反応にイオンは焦りの表情を浮かべながら、両手を前に突き出し、首を左右に振りながら否定の意を促す。

「えっ!? い、いえ、僕はそんな……」

「（実際聞いていたかどうか怪しいものだがな）」

さすが六神将の中でツッコミを担当していた二人（作者の勝手な偏見が入っています）。心中のツッコミも見事に同調している。

「つまり、リグレットは樹海でリングを狙われていたミュウちゃんを助けて、そのまま森を脱出した。そしてフリーダム酒場で気になる情報を手に入れた……ほらちゃんと聞いていたでしょ？」

「（……って、本当に聞いていたのか!）」

聞いていたらいたで今度は妙な腹立たしさが混み上げてくる。

しかし、相手に非が無いとなると何の反論も出来ずにいたツッコミ担当の二人だった。

「そ、それでリグレット? 気になる情報というのは?」

場を静めるのはイオンの役目なのか、再び騒然としそうな雰囲気だったのを、話を戻すことによって事前に抑えることができた。

どこか釈然としないところがあったが、リグレットは再び冷静さを取り戻し、報告を再開した。

「あ、ああ。昨日のことらしいが、私達の知人がルームにて、リングについて探っていたらしいことが分かった」

「知人……だと？ 俺も知っている者か？」

今までツツコミにしか言葉を使っていなかったラルゴが、ここで初めて険しい顔を施しリグレットに質問を掛けた。

リグレットはちらりとラルゴに視線を預けると、小さく頷いて答えた。

「その者は、ヌイグルミを抱いた十歳くらいの女子供で、ライガとフレスベルグを引き連れ、桃色の長髪に黒い導師服を着ていたそう  
だ」

「……っ!?」「」

その言葉を受け、イオン、ラルゴ、そしてミュウまでもが驚愕で顔を引きつらせた。

「なになに？ どうしたの？ みんな」

『彼女』のことを知らないシルヴィアは皆の反応を見て、一人だけ頭にクエスションマークを浮かべていた。

シルヴィアの疑問を代弁するかのようになり、リグレットはここまで  
の経緯から考え、ほぼ確実と取れる推測を皆の前で言い放った。

「つまり 現在アリエッタがヴァーゲスト側に協力している可能性が高い」

ローレライ教団兵『オラクル神託の盾騎士団』の幹部『六神将』の一人、  
通称『妖獣のアリエッタ』。

凶暴な魔物を使役する能力があることから付けられた二つ名だが、  
彼女自身も非常に優れた譜術者であり、魔物との連携にも長けてい  
る。六神将の中で敵対すると最も厄介な相手に成り得るのが彼女か  
もしれない。

かつてフォンマスターガードイアン導師守護役に所属していた彼女、導師イオンに恋心を抱い  
ていたアリエッタにとって、この頃はどれだけ幸せだったことだろ  
うか。

しかし、そんな平穏な日々も長くは続かなかった。

これは一部の人間しか知らなかったことだが……ある日オリジナ  
ルイオンが亡くなってしまったのだ。

オリジナルイオンが死去し、現在ミュウ達の前に居るレプリカイ  
オンが機密ながらに導師の役職に付き、そして事情を知られるわけ  
には行かないために、彼女に解雇処分を下した。

彼女に事情を話しても良かったかもしれないが、イオンがレ  
プリカだと知り、一番悲しむのは彼女だろうという考えから、何も  
伝えず解雇という苦渋の決断を下したのだ。

彼女にとって納得の行かない部分は多々あったが命令には逆らえない。

アリエッタは導師守護役を解任された後、ローレイ教団兵の神託の盾に入団し、幹部六神将という立場にまで昇りつめた。

しかしアリエッタは、自分の代わりに導師イオンを世話するようになった彼女の同僚とも呼べる存在、『アニス』という少女には常に憎悪を抱いていた。

なぜ、導師は自分ではなくアニスを選んだのか……どうして自分は選ばれなかったのか……

そんなずっと懸念を抱いていたアリエッタだったが、ある日、『決定的な事件』が起きてしまう。

それがキツカケで二人は決闘に望むことになってしまう。

結果は アニスの勝利……同時にアリエッタの人生はそこで幕を閉じることになった。

自分が恋した導師イオンがレプリカだと事実も知らずに……

「みゆうう？ ヴァーゲストさんって、あの怖い顔の石造の人ですか？」

「ああ、前にも言ったがこの世界の革命者であり支配者……そして、我々の倒すべき敵だ！」

ヴァーゲストの話題になると、なぜか途端に言葉に力が入るリグレット。

「みゆうみゆう！？ ということはアリエッタさん、敵ですよ！？」

「……そうなる可能性が高いというだけだ。確証があるわけではない……って、お前、酒場での会話を訊いていなかったのか？」

「酒場……ですか？ ああ、とっても美味しかったですの」

「……よかったわね」

リグレットが情報収集をしていた間、ミュウは何をしていたのか一発で理解できる一言だった。

「「……………」」

そんなほのぼののムードを出している二人を余所に、イオンは険しい顔を崩さぬままずっと下を見つめ俯いていた。そんなイオンの様子をラルゴは無言で眺めている。

「イオン君、どうしたの？ あっ、足元のピンク色の絨毯を気に入ってくれたのかな？ えへへ、それね、あたしがデザインした絨毯なの えへへへへ」

一人、勘違い特急列車に乗って行ってしまったシルヴィアは放っておくとして、イオンのただならぬ雰囲気気付いたミュウとリグレットは心配そうに彼に視線を注いだ。

そして、イオンが静かにその重い口を開いた。

「もしかしたらアリエッタの敵対行動の原因は……僕にあるのかも  
しれません」

第18話 導師守護役（後書き）

見てくれてありがとうございます！

いつもより投稿時間が遅くなってしまった（汗

たまに加筆修正に時間がかかってしまうことがあります。

第19話 【回想】イオンとアリエッタ ? (前書き)

今回は過去最高に長いかもしれません。

そしてここからしばらくイオンの回想話 　　もといラブコメが始まります。

## 第19話 【回想】イオンとアリエッタ？

「話すのか？ 導師よ……」

ラルゴは視線と一緒に言葉を向ける。イオンはそれに首を縦に振って答えた。

「アリエッタが敵対している以上、リグレットにはこのことを聞いてもらうべきだと思います」

そう言い放つ彼の表情は真剣そのもの、まるでこれから語られる話の重さを示しているようだった。

「みゆうう……どうせミュウは聞いてもらうべき存在ではないですの……」

「あたし……一応、この国の女王なだけどな……」

名前が出てこなかった二人は、不満を全面に出しながらいじけ始める。

「あつ、いえ、その……もちろんミュウとシルヴィアにも聞いて」

「この二人は無視していいから、さっさと話を始めてくれ」

「えっ！？ あつ……は、はいっ！」

ミュウとシルヴィアのポケポケ発言のせいで、せっかくのシリア

スな雰囲気を一気に崩されかけたが、リグレットとラルゴのナイスなツツコミによって早々に収拾がついた。

そしてイオンの口から、彼がこの世界に来てからの経緯が重々しく語られる。

「僕がこの世界に飛ばされてきた場所……そこは見渡す限り大草原で囲まれた、何も無い平野の真ん中でした」

『グラン・ソウル大陸部中枢平野』

あれ？ どうして僕は意識があるんだろう……

僕はその時……ザレツホ火山で死んだはずなのに……

どうして僕は……起き上がることが出来るのだろう……

「僕は……生きて いる？ どうして……」

意識が覚醒し上体を起こすことが出来たイオンは、ここがどこなのか……なぜ自分は倒れていたのかなどを考えるよりも先に、なぜ自分が生きているのかが不思議でたまらなかった。

無意識に心音を確認したり、足はちゃんと付いているかを確認する辺りが、彼の複雑な心理を表しているようだ。

「心臓は動いている……足も付いている……僕が吸い込んだ瘴気は……感じられない……」

つまり、今ここにいる自分は異常なまでに健康体であることを示している。でも、その現状はあまりにも不自然だった。

死に方がアレだっただけに、もう健康体な自分が存在するなんてことはありえないはず。それなのに……

「考えていても仕方ないですね。それにしても不自然なくらい静かな所ですねえ」

周りに誰もいないのに、つい独り言を発してしまうのは彼の性分なのだろう。

ピカッ！！！

「えっ　？」

不意に背後で大きな光が眩い光沢を放った。

光は円柱状に形が成っており、そして徐々に光明は小さくなって行く。

同時に光の形も円柱状から楕円状へと形状を変えてゆき、光は徐々に薄くなってゆく。

光が収まってゆくと、後光の中から桃色の『何か』が見えた気がした。

「誰か……光の中にいるのですか？」

光はどんどん微薄になってゆき、後光の中には確実に『人』がいることが明確に見えてきた。

「……………」

光の中にいる人物は、まるで眠っているかのようにピクリとも動かない。

そして『人』を包んでいた光は徐々に霧散されてゆくように静かに消え、やがて完全に後光すらも消え失せた。

光の中にいた人間はうつ伏せになっているため顔は見えないが、その倒れている後ろ姿だけでイオンはその人物が誰なのか認識出来てしまった。

イオンは自分の顔が蒼白になっていることが分かった。

「……………んん……………」

光の中にいた人物が微かに呻き声を上げる。

その人物も先ほどまでのイオンと同じく、気を失っているだけらしい。

彼は何が起こったのか分からず、しばし呆然としていたが、その呻き声でハッと意識を取り戻した。

そしてイオンはその人物の名前を高らかに叫ぶ。

「アリエッタっ！！　しっかりっ！　しっかりしてくださいっ！！」

桃色の少女　アリエッタの名を叫びながら、イオンは優しく彼女の身体を揺らす。

「うっ……ううん………えっ？」

アリエッタが小声を上げると、閉ざされていた目がゆっくりと開き、その顔に真紅の瞳が覗かせた。

「……な、なんで……？」

目を開けた先に不意に現れた片想いの相手、この不意打ちにはアリエッタも驚かずには居られない。

「気がついたようですね。よかったです」

彼独特の優しさと安心感を与える温かな笑顔が彼女に向けられる。

「……イオン……様！？」

恋焦がれているアリエッタにとって、その笑顔は余りにも眩しすぎた。

対アリエッタ時のみイオンの笑顔は惱殺スマイルと化すみたいである。

「アリエッタ、立てますか？ ……って、いきなり立ち上がるのは厳しいですよね……さあ、僕の肩に掴まって」

「~~~~っ！」

真っ赤になつて俯くアリエッタを尻目に、イオンは構わず勝手に彼女の手を取り、肩に担ぐような姿勢を取り出した。

「とりあえず、人がいる場所を探しましょう。色々分からないことだらけの時は、人に聞くのが一番ですもんね」

「（こくこく）……」

イオンの台詞にこくこくと首を縦に振って賛同するアリエッタ。

イオンは気付いていなかったが、アリエッタはその惱殺スマイルを目と鼻の先で見ってしまった為、彼女は言葉を失うほどのダメージを受けてしまっていたのであった。

あれから小一時間ほど何も無い平野を歩いた二人。数分してようやく歩けるようになったアリエッタは、なぜか控えめにイオンのやや後方を歩いていた。

運良く魔物とも遭遇せず、些細な会話をしながら仲良く歩く二人……といつてもほとんどイオンが一人で喋りっぱなしであったが……

「あつ、街です！ 街ですよ、アリエッタ！」

目の前に建造物が見えただけで大ハシヤギのイオン。喜怒哀楽の激しい人である。

「は、はいっ」

笑顔を向けられるたびに顔を真っ赤に染めるアリエッタ。

紅潮しっぱなしの色を隠すため、顔を俯かせているが、耳まで真っ赤なためあまり意味は無い。

「あと少しですよ。アリエッタ、がんばりましょう！」

そう言うと、イオンは悩殺スマイルを浮かべたまま、不意にアリエッタの手を握る。

突然手を握られただけでもアリエッタに取っては紅潮物なのに、それにプラスしてこの悩殺スマイルである。それはまさに超絶秘奥義と同等の威力を誇っていた。

そして、その不意打ち攻撃を真正面から受けてしまったアリエッタは

「くっ！！（バタッ）」

失神した。

「ええっ！？ ちょ……アリエッタ！？ どうしたのですかっ！？  
しっかりしてください！」

顔が紅潮したまま気を失ったアリエッタの身体を、馬乗りになっ  
たイオンがブンブンと揺すって起こそうとする。

この体制が更に彼女の気を動転させる行為になっていることを知  
らずに、イオンはいつまでもいつまでも彼女の身体を揺さぶるのだ  
った。

「……うっ……ん……ん……」

本日二度目の昏迷、そして二度目の意識回復。

自分が今寝ている場所は固い土の上ではなかった。

心地良いフカフカのベッドの上、軽く見渡して見るとここはど  
かの民家の中だということがわかった。

「イオン様？ ……イオン……様は……？」

自分の現状を確かめるよりも先に、自分が恋焦がれる相手を無意識に探していた。

しかし、彼の姿は愚か、人っ子一人の気配すら感じない。

彼女の心中は、周りに誰も居ない不安よりも、イオンが側に居ない不安の方が強く押し寄せていた。

アリエッタは慌ててベッドから身を起こし、イオンの姿を探しに行こうとする。

だが、台所の方から食器を載せたお盆を手に持ちながら、彼女が探していた相手が姿を現した。

「あつ、アリエッタ。良かった、気が付いたのですね……って、ダメじゃないですかあ、まだベッドから起きちゃあ。まだ本調子ではないのですから寝ていなきゃダメですよ」

お盆をテーブルに置き、イオンはアリエッタを無理やりベッドに落ち着かせ横にさせた。

「はい、お粥ですよ。料理は成れていなかったなので美味しくないかも知れませんが、一応栄養を取らないといけませんからね。食べられるだけでいいですので頂いてください」

「えっ……あ、ありがとう……ございます……イオン様……」

ここはどこなのか、自分が倒れた後どうなったのか、彼がここまで運んできてくれたのか、訊きたいことは山のようにあるが、今は

彼の厚意を素直に受けることにした。

しかし、彼の厚意はこれだけでは終わらなかった。

アリエッタの言葉にイオンは嬉しそうな表情を浮かべると、彼はお粥をレンゲに救い、彼女の口元へ差し出した。

「さっ、口を開けてください。あ〜んです」

「~~~~っ!?!?」

別にからかっているわけではないのだが、実はこう見えて彼には世話好きな一面があるのだ。

一度面倒を見出したら最後まで面倒を見るタイプのようである。

「あっ、このままでは熱すぎですよね……（ふ〜ふ〜）……はい、これで大丈夫ですよ」

「~~~~っ!?!?!」

アリエッタの顔はもはや『赤』以外の色が見当たらないくらい真っ赤だった。

しかし、大好きなイオンの厚意を無駄にするわけにはいかない。

彼女は意を決して差し出されたお粥（イオンのふ〜ふ〜付き）を口に入れた。

「どうですか？ 自分でも味見はしましたが中々なものでしょう?」

味見した？

このレンゲで？

もしかしてそれって間接……

「……（バタッ）」

「ええっ！？ ど、どうしてまた倒れるのですかぁ！？ し、しっ  
かりしてくださいっ！ アリエッタっ！！！」

本日三回目の意識昏迷。

内二回の原因の根源である人物は、ただ訳が分からずにひたすら  
慌めき騒ぐのであった。

「ううっ……ん」

ベッドの側にある小窓から、暖かな夕日の茜色な光が帯状になっ  
て、アリエッタの小さな身体に注がれる。

三度目に意識が回復した頃には、完全に夕の眼が街全体を覆って

いた。

「……あたし……また……あつ」

ふと自分の隣に何か重みを感じられた。この場合それが何なのか、鋭い読者の皆さんなら想像が付いているかもしれない。

そう、彼女の隣には、アリエッタに寄り添うようにベッドに突っ伏せるイオンの姿が在った。

「イオン……様……」

側で寝ているイオンの頭を滑るように撫でるアリエッタ。

遠慮がちな性格の為か、触っているのかいないのか分からないくらいスレスレの箇所を器用に撫でている。

「……たくさん……迷惑掛けちゃった……」

本来なら自分が彼を守るべき立場にいるはずだったのに……これでは逆だ。

しかし、アリエッタはそれを悔やむ気持ちよりも、大好きな相手が自分の為にここまでしてくれたことが嬉しくてたまらなかった。

「……うゝ……ん……ん」

「……っ！」

イオンが唸るような寝言を漏らすと、アリエッタはビクッと身体

を震わせ、慌ててその手を引っ込めた。

そしてタイミングを図ったかのように、イオンがゆっくりと目を覚まし上体を起こした。

「あつ、すみません……看病するつもりが僕まで寝ちゃってしまいました」

ベタな展開だけに台詞までベタになるイオン。

「あの……イオン様……ごめんなさい！！……あたし……迷惑ばかり」

「気にしないでください。僕こそすみません、アリエッタは体調が悪かったみたいなのに無理して歩かせてしまい……」

別にアリエッタは体調が悪くて倒れたわけではないのだが、この超絶天然男は思いつきり勘違いしているみたいだ。

「そ……そんなこと」

「あつ、そうそう。この民家ですけど、今は空き家みたいなので僕達が自由に使っていていいみたいなんですよ。でも、無料で……というわけにはいきませんでしたので、明日からこの街で家賃代を稼がないといけません……」

アリエッタが慌てて弁明を施そうとするが、イオンは勝手に別の話を始めてしまった為、完全にそのタイミングを逃してしまった。

「ごめんなさい……あたしのせいで……」

とりあえず謝るアリエッタ。その後イオンなら必ずこう言つと知つていながら……

「気にしないでください。それに教会や図書館でのお手伝いなので、色々情報が手に入るかもしれませんし……元々そのつもりでしたからね。一石二鳥ですよ」

「……イオン様……」

イオンの優しさに改めてオープンハートされるアリエッタ。

「その為にしばらくこの家に二人で住む事になりそうですね。同居人としてよろしくです、アリエッタ」

同居……？

二人でこの家に……

住む？

「~~~~つ（バタツ）」

「ア、アリエッタ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~つ!?!?」

本日四度目の意識昏迷。そして三連続の失神オチ……

もうここまで来ると、コントをしているようにしか見えない二人

であつた。

第19話 【回想】イオンとアリエッタ ? (後書き)

「スキット」 【同居一日目・夜】

イオン「さあ、眠りましょうか……っと言ってもベッドが一つしかありませんね」

アリエッタ「あっ……じゃあ、あたしがソファで……」

イオン「さっ、アリエッタ、少し詰めてください」

アリエッタ「えっ？ えっ？ イオンさま!？」

イオン「やはり思った通り大きいベッドなので二人で楽に使えますね。ではお休み、アリエッタ」

アリエッタ「(ええ~~~~っ!?)」

イオン「……zzz」

アリエッタ「(……ね、眠れないよお……イオン様あ)」

第20話 【回想】イオンとアリエッタ ? (前書き)

「スキット」 【同居二日目・朝】

イオン「おはようございます。アリエッタ」

アリエッタ「おはよう……ございます……」

イオン「……? どうしました? 元気ないですね。もしかしてまだ体調がよろしくありませんか?」

アリエッタ「い、いえ! そうじゃなくて……その……眠れなくて……」

イオン「あはは、昨日はたくさん気絶してましたもんね。眠気も無くなってしまったのでしょうか」

アリエッタ「(イオン様のせいですよっ!)」

## 第20話 【回想】イオンとアリエッタ ？

神殿都市『ライムス』。

信仰と栄光の都市と呼ばれているが、奉っているのは神像ではなく、ヴァーゲスト像。はつきり言って、神々しさなど欠片も感じられない。

ある意味ウケ狙いのようにも見えるが、信者達は大真面目で参拝に訪れている。

その都市の居住区の一部にイオンとアリエッタが同居している民家はあった。

「では、今日もがんばってお仕事に勤めましょう！」

「はい……っ！」

イオンの言葉に笑顔で応じるアリエッタ。

同居を始めてから、すでに数日が経っていた。

教会や図書館で仕事をしているうちに、この世界は死者が行き着く異世界であることや、ヴァーゲストという男が世界の中心人物として動いていること、そしてアリエッタを包んでいた謎の光の正体は、この世界に行き着く為に誰もが体験する移転現象であったことなど、様々なことが分かった。

慣れない同居生活に、アリエッタが失神したり、イオンが料理に

苦悩したり、アリエッタが失神したり、イオンが仕事で苦悩したり、アリエッタが失神したり、イオンが音機関係いに苦悩したりと、前途多難な日々が続いたように見えた。

しかし、イオンの柔らかい雰囲気と、アリエッタの素直な性格が功を奏し、街に溶け込むのもそんなに時間が掛からなかった。

そしてアリエッタの心境にある変化が見え始めた。

それは、今彼女が見せたような『笑顔』。今までの彼女を知っている人が見たら、それこそ信じられない光景と思われることだろう。

そんな内攻的な彼女が自然と笑みを漏らすくらい、彼女にとってこの同居生活は幸せで満ち足りているのだろう。

「あ……あの……イオン様……？ その……手を……」

「……？ はい？ 何ですか？」

「い……いいいいい……いえっ！ な、なんでも……ないです……！」

しかし、根本的な内攻的性格は治っておらず、言いたいことがあるとしても素直に伝えることが出来ない所は相変わらずだった。

「……??？ そうですね？ では、神殿へ ではなくて、今日は図書館整理のお仕事でしたね。さあ、図書館へ急ぎましょう」

「あっ……！」

イオンはそう言葉を返すと、彼女の真意を読んだのか、それともただの気まぐれなのか、不意に彼女の手を握ってきた。

「……っ！」

いつもは彼の気まぐれ行動に卒倒するアリエッタだったが、さすがに出勤前から失神するわけにはいかず、彼女は顔を紅潮させながらも必死に悶えるのであった。

居住区と神殿下層区を繋ぐ噴水広場、いつもは静けさだけが漂うような場所のはずだが、今日はなぜかいつもと様子が違っていた。

何やら街の入り口付近で人だかりが出来ている。

不思議に思ったイオン達は近くにいた人に声をかけた。

「あのおく、何かあったのですか？ 皆さんこんなところに集まっていますか……」

イオンが声をかけると、彼のユルイ雰囲気とは対照的に、その男性は非常に慌めいた表情で口を開いた。

「あつ、イオン君にアリエッタちゃん！！ 大変なんだよ！ どうやら街に魔物が侵入してきたとかでっ！」

「「ええっ!?!」」

男性の言葉に驚きで顔を見合わせる二人。

神殿都市といっても治安を守る役人はいるだろうが、二人の性格からして素直に傍観するつもりなど毛頭なかった。

「行きましょう! アリエッタ!」

「はいっ!」

「えっ? 行くなって二人共……って、おい! そっちは危ないって!」

心配する男性の言葉を余所に、すでに走り出していった二人の耳には届いていなかった。

「ガウ~~~~っ! ガウガウガウっ!」

街の入り口に近づくに連れて、魔物の咆哮が徐々に大きく聴こえてくる。

「……あれ? この声……」

魔物の咆哮を聴いたアリエッタは、脳裏の奥に聞き覚えがあった

その声に疑問を憶える。

イオンとアリエッタは野次馬を掻き分け、少々強引に街の外門へと駆けつけた。

そして野次馬の先頭に立った二人は、襲撃者の正体に驚きの表情を浮かべた。

「ガウツ！ …… きゅーん ……」

まるで犬みたいな咆哮を上げていたのは、数人の役人達に取り押さえられているライガだった。

アリエッタの目が驚きで見開かれる。

そして次の瞬間には周囲の目も気にせず、大きく声を上げていた。

「やめてっ！！」

空気が張り裂けるようなアリエッタの叫び、それを訊いた一同は、一斉にシンッと静寂を齎した。

野次馬、そして役人達が、アリエッタの方へ一斉に視線を集める中、そんな注目などもお構いなしに、彼女は一目散に役人達に捕らわれかけていたライガの元へ走る。

そしてアリエッタは、役人達を睨みながら彼女は高らかにこう叫ぶ。

「この子はアリエッタのお友達……！ ライガママの子供でアリエ

ツタの大切なお友達なのっ！」

アリエツタはライガを優しく抱きかかえ、ライガ自身も彼女の優しさに答えるようにアリエツタに頬擦りを交わした。

「お友達って……」

役人達にはアリエツタの言葉と行動に、呆気にとられながら動揺を示す。

そして彼女の言葉に補足するかのように、ゆっくりと近づいてきたイオンが口を開く。

「彼女の言っていることは本当ですよ。恐らくこのライガは、アリエツタの匂いを嗅ぎ付けてここにやってきただけでしょう。それとついでに断言しますが、このライガはアリエツタが命令でも下さない限り絶対に人へは危害を加えたりしません。断言します」

そう言つと、イオンもライガの元へ近づき、笑顔を向けながら頭を撫でた。

するとライガも気持ち良さそうに目を細め、イオンにも頬擦りを交わした。

「ですので、この子を捕らえるのは待つて頂けませんか？ それと出来ればこの子も街の中へ居れてあげたいのですが……」

ついで にはしては結構無茶な注文を縋るイオン。当然役人達は言葉を唸らせた。

「まあ、捕らえるのは見逃してもいいのだが……さすがに魔物を街に入れるわけには……」

当然の如く、役人の言葉から出てくるのは否定の意。というか、ここで、『オツケ　じゃあこの子も今日から街の住民だ！』なんて言われたら、それはそれで問題である。

「そうですか……仕方ありません。アリエッタ、街を出しましょう。この子をこのまま放って置くわけにもいかないでしょう？」

「イオン様……でも……いいのですか？」

アリエッタが今にも泣きそうな顔でイオンの顔を見つめる。

しかし、イオンは終止笑顔で

「大丈夫ですよ　この世界の情報もたくさん手に入れましたし、それに借家の家賃もこの前支払いましたからね」

いつもの優しい言葉。それも偽善やたてまえではなく、本心からの言葉だ。彼の言葉にはいつも嘘偽りはなかった。

イオンはそのままクルリと半回転し、野次馬に来ていた街の住人達と向き合った。

「ということなので、僕達は街を出ることに決めました。皆さん短い間ですけど、お世話に　」

「「「いやああああっ！　行かないでええええっ！　イオンきゅうううんん！！」「」」

イオンがペコリとお辞儀をした瞬間、野次馬達の女性達から悲鳴に近い声があがった。

「……そうだ！俺達の前から居なくならないでくれえええつ！  
アリエツタちゃああああん！！！！」

続いて男達の悲鳴。

そう　今悲鳴を上げた者達の正体は、密かに街で結成されていた、イオンとアリエツタの親衛隊だった。

その名も『イオンきゅんラブリー親衛隊』と『アリエツタちゃん萌え萌え親衛隊』。実はこの二人、本人達は気付いていなかったが、知らぬうちに街のアイドル的存在に祭り上げられていたのだ。

「い、いえ……しかし、街の皆さんには迷惑は掛けられませ」

「違う！　違うわ！　全然迷惑なんかじゃない！」

「そうだ！　それに『ライガを街で飼つてはいけない』なんて法律はないはずだ！」

「そうよ！　ちょっとそこの役人達！　待遇がオカシインじゃない！？」

「そうだそうだ！　それにお前（役人）も、『アリエツタちゃん萌え萌え親衛隊』のメンバーじゃないか！　しかもお前、会員ナンバー001だろ！？　このままアリエツタちゃんが居なくなってもいいのか！？」



役所の方向で大きな罵声上がっている。二つの親衛隊を中心に抗議デモが行われているのだろう。

こうなればアリエッタの旧友であるライガを街に入れる許可が出るのは恐らく時間の問題だ。

バサバサバサバサッ

そして、誰にも気付いて貰えなかったが、もう一匹のアリエッタの旧友とも言える魔物 フレスベルグが『自分もここに居たのですが……』と言わんばかりに、大きな翼で大音を立てていたのだった。

第20話 【回想】イオンとアリエッタ ? (後書き)

「スキット」 【同居二十日目・昼】

イオン「アリエッタ、今日はお昼どつします?」

アリエッタ「あっ! そ……その……今日は……お弁当を……作ってきたんです……」

イオン「本当ですか!?! うわぁ、嬉しいなあ。では今日のお昼はそれで決まりですね」

アリエッタ「はい……はい……これです」

イオン「わあっ! すごく豪華で美味しそうですね! では早速頂きましょう!」

アリエッタ「ハイ……ど、どうぞ……」

イオン「……あ、あの……アリエッタ? 僕にも箸を……」

アリエッタ「あ……あ……ん……です」

イオン「もしかして、食べさせてくれるのですか?」

アリエッタ「(くくく)……」

イオン「それでは……あ……ん……(もぐもぐ)……うん、とっても

美味しいですよ！」

アリエッタ「~~~~っっ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3028z/>

---

テイルズオブジァビス 【ミュウの異世界冒険記】

2011年12月29日13時50分発行